２『アンフォゲッタブル』成井豊

○ジャンル／ＳＦ
○ストーリー／恭一は伯父が営む骨董屋で働いている。１２歳の時、両親が交通事故で亡くなり、伯父の家に引き取られたのだ。５月、恭一は伯父の娘・唯に頼まれ、ある女性の観光ガイドを頼まれる。彼女の名前は鈴江ワトソン。世界的に有名な画家の未亡人で、３８年ぶりにアメリカから帰国したのだ。恭一は鈴江のガイドをすることを知っていた。なぜなら、１２歳の時の事故以来、人生をデタラメな順番で生きるようになったのだ……。
○出演者／男６＋女７＝計１３
○上演時間／１１５分

登場人物

恭一（骨董屋）
鈴江（画家の未亡人）
倫太郎（恭一の義兄、ミステリー作家）
唯（恭一の義妹、ＯＬ）
健成（広告デザイナー）
山名（ブローカー）
ヒロト（山名の部下）
美波（美術商）
あんり（美波の部下）
絹代（健成の母、社長夫人）
理香（健成の従妹）
節子（編集者）

弦五郎　（恭一の義父、骨董屋）

ドアが閉まる音。エンジンがかかる音。車が発進する音。車が走る音。車がカーブを曲がる音。急ブレーキの音。

五月一日夕。横浜にある、上杉画廊。あんりと恭一がやってくる。

あんり　社長！　武田さんが来ました！　社長！

そこへ、美波がやってくる。

美波　武田君、遅かったじゃない。

恭一　慌てて、事故を起こしたくなかったんで。

美波　あの人たち、五時にここへ戻ってくるのよ。あと十五分しかないじゃない。

恭一　俺は今日は休みだったんですよ。文句を言われる筋合いはない。

美波　それはわかってるけど、君がどうしても必要だったのよ。悔しいけど、真贋を見極める力は、私より上だから。

あんり　社長、おしゃべりしてると、時間が。

美波　そうだったわね。あんりちゃん、例の絵、持ってきて。

あんり　はい、ただいま。

あんりが去る。

恭一　で、その絵を持ってきたのは？
美波　山名正清って人。（名刺を差し出して）知ってる？
恭一　（受け取って）いや。誰の紹介です。
美波　斯波組の組長さん。
恭一　てことは、こいつもヤクザですか。（名刺を差し出す）
美波　（受け取って）ううん。ブローカーをやってるって言ってた。哺乳瓶から棺桶まで、何でも扱ってるって。
恭一　聞きましたか。その絵をどうやって手に入れたのか。
美波　聞いたけど、答えなかった。まさか、盗んだわけじゃないと思うけど。
恭一　その可能性がないとは言い切れませんよ。
美波　やっぱり、手を出さない方がいいかな。でも、真作だったら、とんでもない掘り出し物なのよ。

そこへ、あんりが戻ってくる。手には布をかけたキャンバス。

あんり　社長。（とキャンバスを差し出す）
美波　（受け取って）ありがとう。（恭一に）アンドリュー・ワトソン。一九五二年の作品だって。（と布を取って）どう？
恭一　こいつはいい絵だ。
美波　でしょう？　私は真作に間違いないと思ったんだけど、今一つ自信がなくて。
恭一　それはそうでしょう。俺もこんな絵は見たことがない。

あんり　やっぱり。レゾネには載ってなかったんですよ。
美波　（恭一に）でも、山名って人は自信たっぷりだった。「あなたが買わないなら、他に持っていきます。ワトソンなら人気もあるし、すぐに買い手が見つかるでしょう」って。
あんり　どうですか、武田さん？

そこへ、山名とヒロトがやってくる。

ヒロト　失礼します。
美波　え？　もう？
あんり　いいえ、五時までまだ十分あります。
美波　山名さん、あと十分だけ待ってもらえませんか？
山名　その人は誰です。
美波　私の大学の後輩で、武田恭一。日暮里で、骨董屋をやっています。
山名　骨董屋に鑑定を頼んだんですか？
美波　その点はご心配なく。彼の目は確かですから。武田君、紹介するわ。その絵をお持ちくださった、山名さんと――――
ヒロト　細川です。（と一礼する）
山名　（美波に）で、結論は出ましたか。
美波　すいません。武田は今来たばかりなので。
山名　他の人に頼らなくても、あなたなら一目でわかるでしょう。僕はそう聞きましたよ。
美波　どなたに？

山名　六角興業の斯波社長ですよ。以前、斯波さんが贋作をつかまされそうになったところを助けられたって。

美波　実は、あの時も彼に鑑定を頼んだんです。

山名　なんだ、そうだったんですか。

美波　どうなのよ、武田君？　その絵は真作なの？　贋作なの？

恭一　（山名に）一億で買い取ります。これが真作だったとしたら。

あんり　ということは、贋作？

恭一　九九パーセント、間違いない。確かに、この絵のタッチは、アンドリュー・ワトソンのものによく似ている。この風景は、彼が住んでいた、ベンシルヴァニアの農村でしょう。しかし、彼が風景画を描いたのは学生時代だけで、売り物としてマーケットに出たことはない。噂によると、遺族が保管していて、外には出さないらしい。

美波　でも、絶対とは言い切れないでしょう？

恭一　だったら、なぜここにあるんです。ベンシルヴァニアにあるはずのものが、なぜいきなり横浜で見つかるんです。

山名　つまり、武田さんは贋作だと断言するわけですね？

恭一　残念ですが。しかし、たとえ贋作だとしても、この絵の出来は悪くない。一億は無理だが、十万なら買い取りましょう。

山名　十万だと？

恭一　ご不満でしたら、他へどうぞ。どこへ持っていこうと、十万以上は――――

車が走る音。恭一の動きが止まる。部屋の明かりが点滅する。

美波　あら、どこかで工事でもやってるのかしら。珍しいわね。
あんり　武田さん？　武田さん？
恭一　え？
あんり　どうしたんですか？　気分でも悪いんですか？
恭一　えーと、君は？
あんり　は？
恭一　ああ、あんりちゃんだったな。ということは、ここは上杉画廊か。
美波　どうしたの、武田君？
恭一　いや、別に。
山名　じゃ、僕はこれで失礼します。十万では話にならないんでね。ヒロト。
ヒロト　はい。（とキャンバスに手を伸ばす）
恭一　ちょっと待て。
ヒロト　何だよ。
恭一　この絵は、アンドリュー・ワトソンだな？
ヒロト　そうだよ。さっきから、そう言ってるだろう。
恭一　しばらく預からせてくれ。悪いようにはしないから。
山名　なぜです。その絵は贋作なんでしょう？
恭一　冗談じゃない。この絵は一〇〇パーセント、真作だ。
美波　何ですって？
恭一　美波さん、この絵をお願いします。（とキャンバスを渡して）そいつらには絶対に返さないでください。じゃ、俺はこれで。
美波　ちょっと！　武田君！

恭一が走り去る。

美波　どうなってるの、あの人？
あんり　結局、その絵は贋作なんでしょうか、真作なんでしょうか。
山名　どっちにしても、商談は不成立です。その絵は引き取らせてもらいます。
美波　まあまあ、そう結論を急がないで。武田の言った通り、しばらく預からせてください。お願いします。
山名　仕方ないな。じゃ、一週間だけ待ちましょう。いい買い手を探してくださいよ。
美波　希望価格は？
山名　武田さんがつけた値段が最低ラインです。
美波　ということは、一億？
ヒロト　頼んだよ、おばさん。

山名とヒロトが去る。

美波　今、なんて言った？　おばさんだと？

美波とあんりが去る。
恭一がやってくる。車に乗り、走り出す。交差点を駆け抜ける。高速に乗る。カーブを曲がる。急ブレーキ。車から降りて、走り去る。

二時間後。自由が丘にある、倫太郎のマンション。恭一と倫太郎がやってくる。

倫太郎　そろそろ来る頃じゃないかと思ってたんだ。確か、去年もこれぐらいの時間だっただろう。

恭一　そうだったかな。

倫太郎　おまえ、忘れたのか？　俺がスパゲティを茹でてるところに現れて。気づいた時には焼きそばになってたんだ。

恭一　それって、いつの話だっけ。

倫太郎　だから、今、言っただろう。去年の五月一日だよ。

恭一　そうじゃなくて、何年の。

倫太郎　そうか。おまえ、今が何年か、わかってないのか。

恭一　ああ。新聞もテレビも見る暇がなかったんだ。スキップして、すぐにここに来たから。

倫太郎　今は西暦二〇〇二年。平成十四年だ。

そこへ、節子がやってくる。

節子　すいません、おトイレをお借りしてました。

倫太郎　どうぞどうぞ。（恭一に）悪いが、今、打ち合わせ中なんだ。詳しい話は、後にしよう。

恭一　じゃ、俺は日記を読んでる。どこにある。

倫太郎　書斎だ。今、取ってくる。

倫太郎が去る。

節子　昨日はどうも。

恭一　昨日？　俺たち、昨日も会ったっけ？

節子　何言ってるんですか。ここで一緒に食事をしたじゃないですか。先生が作った、石焼きビビンバ。

恭一　兄貴は自分が作ったものを他人に食わせるのが好きだからな。

節子　食事の後、先生が言ったこと、覚えてます？

恭一　「うまかった？」だったかな。

節子　違いますよ。「明日までにいくつかアイディアを考えておく」って、自信たっぷりに言ったじゃないですか。それなのに、今日来てみたら、「ごめん、一つも浮かばなかった」って。武田倫太郎ともあろう人が、情けない。

恭一　アイディアって、次の小説の？

節子　決まってるでしょう？　私が新米だからって、ナメてるんだわ。今日こそはタイトルだけでも決めてもらわなくゃ。

恭一　俺、兄貴と話があるんだけどな。

節子　それは、こちらの用事が済んでからにしてください。

恭一　しかし――――

そこへ、倫太郎が戻ってくる。

倫太郎　大変だ、恭一。日記がない。
恭一　嘘だろう？
倫太郎　確か、書斎に持っていったと思ったんだが。おかしいな。
節子　日記って、これですか？（と本を差し出す）
恭一　あ。（と本を奪い取って）君、これを読んだのか？
節子　洗面台の上の置きっ放しにしてあったんです。水に濡れたらまずいと思ったんで。
恭一　俺は読んだかどうか聞いたんだ。
節子　読んでません。他人の日記を読むなんて悪趣味なこと、私がすると思いますか？
恭一　（倫太郎に）どうなんだ。
倫太郎　え？
恭一　こいつは一体何者なんだ。信用しても大丈夫なのか？
倫太郎　おまえ、この人に会うのは今日が初めてなのか？
恭一　昨日も会ったらしいけど、覚えてないんだ。
倫太郎　花川書房の小笠原君だ。四月から、俺の担当になった。
節子　信じられない。あんなにたくさん話をしたのに、覚えてないなんて。
倫太郎　こいつは子供の時から忘れっぽいヤツなんだ。いまだに、僕の顔も忘れるぐらいだし。（恭一に）なあ？
恭一　待ってくれ。今、思い出すから。（と本を開く）

倫太郎　小笠原君、悪いが、コーヒーをいれてきてくれないか。
節子　私がですか？
倫太郎　編集者の仕事は、作家にいい小説を書かせること。一杯のコーヒーが思わぬ着想を生み出すかもしれない。
節子　先生、お砂糖とミルクは？
倫太郎　たっぷりいれてくれ。恭一の分も。うちの兄弟は甘党なんだ。

節子が去る。

倫太郎　見つかったか、昨日のページ。
恭一　ああ。「兄に小笠原節子を紹介される。三人で夕食」。
倫太郎　やっぱり、覚えてないのか？
恭一　いや、やっと思い出した。あの女、一人でワインを三本も飲みやがって。そのくせ、顔色一つ変えなかった。
倫太郎　酒も強いが、気も強い。ああいう女が担当になると、作家は大変だ。
恭一　タイトルが決まるまで帰らないって言ってたぜ。
倫太郎　まいったなあ。今、何もネタがないんだ。
恭一　よかったら、また教えようか？　十年後か二十年後に、ベストセラーになる小説のネタ。
倫太郎　いや、いい。次のヤツは自分で考える。いつまでも、おまえに頼るわけにはいかないから。
恭一　電話だ。また美波さんからかな。（と携帯電話を取り出す）

別の場所に、唯が現れる。

恭一　もしもし。

唯　あ、お義兄ちゃん？　私。

恭一　（倫太郎に）唯からだ。（唯に）何か用か。

唯　今、どこにいるの？

恭一　兄貴のマンションだ。

唯　そう。じゃ、今から行くね。

恭一　何をしに。

唯　お義兄ちゃんに頼みたいことがあるのよ。詳しいことは行ってから話す。私が行くまで、帰らないでよ。じゃあね。

恭一　おい、待てよ。

唯が去る。

倫太郎　唯のやつ、何だって？

恭一　俺に頼みたいことがあるってさ。

倫太郎　頼みって？

恭一　観光ガイドさ。ミセス・ワトソンの。

一時間後。唯がやってくる。恭一は日記を読んでいる。

唯　ごめんね。いきなり押しかけちゃって。

倫太郎　仕事の帰りか？
唯　まさか。今、十連休の真っ最中。
倫太郎　いいなあ、ＯＬは。俺みたいな仕事をしてると、休みなんかあってないようなもんだ。
唯　ゴールデンウィークぐらい休んだら？
倫太郎　そうしたいのはやまやまなんだが、今も次の小説の準備があって。おまえ、今年は旅行に行かないのか。
唯　うん。いろいろしなくちゃいけないことがあって。
倫太郎　たとえば。
唯　私の知り合いに、今川って人がいるんだけどね。その人の叔母さんがアメリカに住んでるのよ。アメリカに行ったのは、大学を出てすぐだから、二十二歳。その叔母さんが、今朝、日本に帰ってきたの。（恭一に）ちょっと、恭一義兄ちゃん、聞いてる？
恭一　聞いてるよ。
唯　叔母さんは今年で六十歳だから、三十八年ぶりの帰国ってわけ。で、せっかくだから、東京見物をしたいって言い出したのよ。
倫太郎　なるほど。そのガイドをおまえが引き受けたってわけか。
唯　ううん。恭一義兄ちゃんに引き受けてほしいの。
倫太郎　なぜ恭一に。
唯　叔母さんが見たいのは、東京タワーとか国会議事堂じゃないの。美術館なのよ。何でも、亡くなった旦那さんが有名な画家だったんだって。だから、叔母さんも絵が大好きなのよ。
倫太郎　絵に詳しい人間なら、他にもいるだろう。

唯　問題は他にもあるの。叔母さんは、周りに日本人がいないところで生活してたのよ。だから、日本語より英語の方が得意になっちゃって。ガイドは英語が話せる人がいいって言ってるの。その点、恭一義兄ちゃんなら、しょっちゅう海外に行ってるから、心配ないし。

倫太郎　ガイド代は出るのか？　せっかくの休みに、ただ働きはかわいそうだぞ。

唯　それは私がちゃんと交渉する。叔母さんはお金持ちだから、かなり出してくれるんじゃないかな。（恭一に）どう？　引き受けてくれない？

恭一　断る。

唯　どうして？

そこへ、節子がやってくる。お盆の上に、コーヒーカップが四つ。

節子　お待たせしました。

倫太郎　悪いね。何度も何度も。

節子　先生、アイディアの方は？

倫太郎　ごめん、今、大事な話をしてるんだ。それが終わったら、考えるから。

唯　（恭一に）ねえ、どうしてよ。

倫太郎　仕事が忙しいんだろう。恭一も俺と同じで、休みなんかない。武田骨董店は零細企業だからな。

唯　でも、毎年、ゴールデンウィークだけは休みを取るじゃない。どこにも行かないで、家でゴロゴロして。今日だって、そうでしょう？

倫太郎　いや、今日は仕事に行ったらしいぞ。（恭一に）なあ？

唯　倫太郎兄ちゃんは黙ってて。私は恭一義兄ちゃんと話してるの。

恭一　正直に言えよ。おまえは叔母さんにガイドを断られた。だから、俺に頼みに来たんだろう？

倫太郎　本当か、唯？

唯　（うなずく）

倫太郎　なぜだ。なぜ断られたんだ。

恭一　英語も絵もわからないからさ。唯は叔母さんのお眼鏡に叶わなかったんだ。

唯　恭一義兄ちゃん、叔母さんのこと、知ってるの？

恭一　ただの勘だよ。俺が叔母さんだったら、「誰か他の人にしてくれ」って言うだろうと思ったんだ。

唯　叔母さんは、アンドリュー・ワトソンの未亡人なのよ。知り合いになって、損はないでしょう？

節子　ワトソンて、画家の？

倫太郎　小笠原君、絵の世界、詳しいの？

節子　ワトソンぐらい、誰でも知ってますよ。現代アメリカ美術を代表する人じゃいですか。

恭一　（唯に）それがどうした。ワトソン本人ならともかく、未亡人と知り合って、何の得がある。

唯　私は恭一義兄ちゃんにやってほしいの。他に頼む人がいないのよ。お願い。

恭一　わかった。引き受けてやるよ。

唯　え？

恭一　人に物を頼む時は、ストレートに頼め。うまく丸め込もうなんて思うな。

唯　ありがとう。

恭一　ただし、これだけは言っておく。俺は、結婚には反対だ。

倫太郎　結婚て？

恭一　（唯に）おまえは今川ってやつと結婚するつもりなんだろう。俺に頼みに来たのも、今川を助けるためなんだろう。

倫太郎　そうなのか、唯？

唯　（恭一に）どうして反対するの？　恭一義兄ちゃんは今川さんに会ったこともないのに。

恭一　これも勘だよ。俺の勘は、子供の頃からよく当たるんだ。おまえだって、知ってるだろう。

唯　勘で反対するなんて、ひどすぎる。私の人生に口出ししないで。

恭一　俺がいくら反対しても、おまえは結婚をやめないだろう。しかし、これだけは忘れるな。俺は反対したんだ。

唯　（背を向けて、歩き出す）

倫太郎　待てよ、唯。叔母さんの件はどうするんだ。

唯　（恭一に）明日の朝九時、品川のプリンセスホテルに来て。

唯が去る。

倫太郎　小笠原君、コーヒーのおかわり。

節子　またですか？　これで四杯目ですよ。

倫太郎　四杯のコーヒーが思わぬ着想を生み出すかもしれない。

節子　三杯でダメだったのに、なぜ四杯で。

節子が去る。

倫太郎　恭一、今の話は本当か？　唯が結婚するっていうの。
恭一　ああ。式は十月。今は、式場や披露宴の手配をしてるはずだ。
倫太郎　だから、唯のやつ、旅行に行かないのか。で、相手はどんなやつなんだ。
恭一　名前は今川健成。早稲田を出て、今は広告のデザイナーをやってる。
倫太郎　俺の後輩じゃないか。早稲田の人間に悪いやつはいない。それなのに、なぜ反対したんだ。
恭一　やつは唯を不幸にする。俺はこの目で見たんだ。
倫太郎　いつ。
恭一　二〇〇七年。今から五年後だ。
倫太郎　よし、唯の結婚を止めよう。
恭一　無理だよ。今のあいつは幸せいっぱいだ。何を言っても、聞く耳を持たない。
倫太郎　じゃ、おまえは唯が不幸になるのを黙って見てろって言うのか？
恭一　仕方ないだろう。それがあいつの人生なんだから。
倫太郎　冷たいやつだな。自分の手で助けてやろうとは思わないのか？
恭一　思わない。下手なことをして、もっと不幸になったらどうするんだ。
倫太郎　それはやり方次第だ。俺だって、おまえのおかげで作家になれたじゃないか。
恭一　それは、義兄さんがそう望んだからだ。あいつの人生を勝手に変える権利は誰にもない。
倫太郎　恭一、おまえにとっては義理の妹だろうが、俺にとっては本当の妹なんだ。
恭一　俺にとっても妹だ。（と背を向けて歩き出す）
倫太郎　帰るのか。
恭一　義兄さんが何をしようと構わない。しかし、俺は絶対に手伝わないからな。

恭一が去る。そこへ、節子が戻ってくる。

節子　　あれ、弟さんは？

倫太郎　　あんなやつ、弟でも何でもない。

倫太郎が去る。後を追って、節子が去る。

五月二日朝、品川にある、プリンセスホテルのロビー。恭一・唯・健成がやってくる。

唯　珍しいね。お義兄ちゃんが時間を守るなんて。
恭一　レディーを待たせるわけには行かないからな。レディーって言っても、おまえのことじゃなくて――
唯　叔母さんのことでしょう？　わかってるよ。
健成　（恭一に）すいませんでした。いきなり面倒なことを頼んじゃって。
恭一　礼なんか、言わなくていい。俺は別に、君のために引き受けたわけじゃない。
健成　唯のためですか？
恭一　唯？
健成　いや、その、唯さんのためですか？
恭一　それもあるが、大部分は商売のためだな。君の伯母さんと仲良くなれたら、ワトソンの新しい絵が手に入れられるかもしれない。
健成　伯父の絵は、そんなに価値があるんですか？
恭一　ゴッホやピカソほどじゃないが、結構、人気があるんだ。昨日、手に入れたやつは一億で買い取ろうと思ってる。
健成　一億？
恭一　君の伯母さんの家には、そういう絵がゴロゴロあるはずだ。このまま眠らせ

健成　ておくのは惜しい。
唯　そうですか。
健成　健成君、伯母さんを呼んできたら？
恭一　ああ。（恭一に）じゃ、お義兄さんはここで待っててください。
健成　お義兄さん？
　いや、その、行ってきます。

健成が去る。

恭一　あんなやつのどこがいいんだ。
唯　確かに、ちょっとそそっかしいところはあるけど、とっても優しい人なのよ。
恭一　お義兄ちゃんと違って。
　優しいのは、おまえに惚れてるからだ。結婚して、一緒に暮らすようになったら、だんだん冷める。優しさも消える。
唯　あの人は違う。
恭一　なぜわかるんだ。おまえ、前にもあいつと結婚したことがあるのか？
唯　どうしてそうやって、意地悪なことばっかり言うの？　私が結婚するのが、そんなに悔しい？
恭一　なぜ俺が悔しがらなくちゃいけないんだ。
唯　私の方が先に結婚するからよ。でも、私はもう二十五なんだからね。お義兄ちゃんがお嫁さんをもらうのを待ってたら、売れ残っちゃうじゃない。
恭一　焦って変なのをつかむより、じっくり待った方がいいと思うがな。
唯　変じゃない。あの人はとってもいい人なの。

恭一　（遠くを見て）ほら、健成君が戻って来たぞ。
唯　横にいるのが、伯母さんよ。
恭一　ミセス・ワトソン。世界一の頑固者だ。

そこへ、健成と鈴江がやってくる。

健成　お待たせしました。紹介します。僕の伯母の鈴江ワトソンです。
鈴江　（うなずく）
唯　こちらは、私の義兄の恭一です。
恭一　（鈴江に）初めまして。武田恭一です。日暮里で、骨董屋をやっています。と言っても、社長は義父で、僕はただの平社員ですが。お会いできて、光栄です。
鈴江　（英語で）あなた、アメリカに来たことはある？
恭一　（英語で）仕事で毎年行ってます。多い時は、年に三回。
鈴江　（英語で）ベンシルヴァニアには？
恭一　（英語で）一度、車で通りすぎました。ニューヨークからシカゴへ行った時に。残念ながら、チャッズフォードには寄れませんでしたが。
鈴江　（英語で）好きな画家は誰？
恭一　（英語で）アンドリュー・ワトソン、と言いたいところですが、正直に言うと、佐伯祐三が好きです。日本の画家ですが、ご存じですか？
鈴江　もちろん。いいわ。ガイドはあなたにお願いします。
恭一　今のはテストだったんですか？
健成　伯母さん、お義兄さんには唯が無理を言って、わざわざ来てもらったんだ。

鈴江　テストなんて失礼じゃないか。
私は夢を英語で見ます。考え事も英語でします。たぶん、暴漢に襲われた時も、英語で叫ぶでしょう。だから、英語の達者な人でないと、困るの。
恭一　なるほど。で、まずはどこへ行きます。
鈴江　アンディの絵が見たいわ。
恭一　だったら、お台場現代美術館だ。あそこなら、五枚置いてある。
唯　頑張ってね、お義兄ちゃん。

唯と健成が去る。
恭一と鈴江が車に乗る。車が走り出す。

恭一　どうですか、東京は。三十八年前と比べて。
鈴江　あなたは三十八年前を知らないでしょう？
恭一　テレビのドキュメンタリーで見たことがありますよ。一九六四年っていったら、東京オリンピックの年ですよね？
鈴江　オリンピックは十月。私は五月に渡米したの。だから、何も見てない。
恭一　力道山が殺されたのは、前の年でしたっけ？
鈴江　力道山？
恭一　プロレスラーですよ。街頭テレビで大人気だったんでしょう？
鈴江　私はスポーツには興味がないの。おしゃべりがしたかったら、別の話題にして。それがいやなら、口を閉じて。
恭一　（黙る）
鈴江　なぜ黙るの。

恭一　だって、あなたが口を閉じろって。
鈴江　あなたはガイドでしょう。窓から見える街並みとか、これから行く美術館の歴史とか、説明したらどうなの？
恭一　わかりましたよ、ミセス・ワトソン。
鈴江　今、「うるせえババアだな」って思ったわね？
恭一　まさか。
鈴江　私はあなたを使用人扱いするつもりはない。今日という日を一緒に過ごすんだもの。できれば、仲良くやっていきたいわ。あなたのファーストネームは恭一だったわね？
恭一　ええ。
鈴江　あなたのこと、恭一と呼んでも構わない？
恭一　もちろん。僕はあなたを何と呼べば？　スージーですか？
鈴江　（英語で）なぜ私のあだ名がスージーだと？
恭一　（英語で）鈴江だからスージー、そう考えただけです。
鈴江　（英語で）いいわ。スージーと呼んで。
恭一　スージー。プププ。
鈴江　何がおかしいの？
恭一　いいえ、別に。

三時間後、お台場現代美術館。別の場所に、倫太郎が現れる。鈴江は去る。

恭一　（携帯電話を取り出して）もしもし。
倫太郎　恭一か、俺だ。

恭一　何だよ。やっぱりネタを教えてくれって言うのか？
倫太郎　そうじゃない。唯の結婚相手の話だ。
恭一　今川健成か？　さっき会ったよ。二〇〇二年の健成は、そんなに悪いやつじゃなかった。
倫太郎　それがそうでもないんだ。実は、広告関係の知り合いに片っ端から電話して、今川の素性を調べてみたんだ。
恭一　そんな暇がよくあるな。仕事の方はいいのか？
倫太郎　妹の未来がかかってる時に、仕事なんかできるか。で、今川だがな、広告デザイナーとしてはまだ駆け出しで、そんなに名前は売れてないらしい。父親は鎌倉の資産家で、今川はその一人息子。趣味は船で、友達と共同出資でクルーザーを一隻持ってる。つまり、遊び好きのお坊っちゃまというわけだ。
恭一　知ってるよ。俺もその船に乗らないかって誘われた。
倫太郎　いつ。
恭一　二〇〇三年。来年だ。
倫太郎　俺の推理はこうだ。ある日、今川は船で海に出る。そこへ、突然、嵐が襲いかかるんだ。今川は必死で船を操縦するが、大自然の猛威には叶わない。ついに海の藻屑となる。唯は若くして、未亡人になるんだ。唯が不幸になるっていうのは、このことなんだろう？
恭一　全然違う。（と携帯電話を切る）

そこへ、鈴江が戻ってくる。倫太郎が消える。

鈴江　誰から？

恭一　義兄です。僕がちゃんとガイドをしてるか、心配だったみたいで。
鈴江　なぜ嘘をつくの？　私に知られたらまずいことなの？
恭一　プライベートなことまで答える義務はありません。
鈴江　でも、今は勤務時間中よ。
恭一　わかりました。今度かかってきた時は、すぐに切ります。で、どうでした、この美術館は。
鈴江　かつらをかぶった和尚さん。
恭一　どういう意味です？
鈴江　外見は立派だけど、中身は貧弱。アンディの絵が「寒い寒い」って震えてた。
恭一　ここはまだできたばかりなんです。日本の美術館がみんなこうだと思わないでください。
鈴江　そうであることを祈るわ。
恭一　じゃ、次は定石通り、上野にしておきますか。
鈴江　絵より、景色が見たいわ。しばらくドライブをしましょう。
恭一　美術館に行かないなら、僕がガイドをする意味はないと思いますが。
鈴江　つべこべ言わずに、車を出しなさい。
恭一　行き先は。
鈴江　どこか、お勧めのコースはある？
恭一　ちょっと遠いけど、横浜に行きますか。僕の知り合いがやってる、画廊があるんです。
鈴江　もしかして、アンディの絵が？
恭一　ありますよ。一枚だけですけど。

四時間後、上杉画廊。美波とあんりがやってくる。あんりは、茶碗と和菓子を載せたお盆を持っている。

美波　ようこそ、ミセス・ワトソン。武田君に電話をもらって、ビックリしたんですよ。まさか、アンドリュー・ワトソン画伯の奥様がうちの画廊に足を運んでくださるなんて。

恭一　美波さん、紹介してもいいですか。

美波　どうぞどうぞ。

恭一　（鈴江に）こちらがこの画廊の経営者の上杉美波。後ろにいるのが、社員の畠山あんりです。

あんり　（鈴江に）初めまして。

美波　何時間も車に揺られて、お疲れでしょう？　お口に合うかどうかわかりませんけど、よかったら召し上がってください。（と茶碗と和菓子を示す）

恭一　これ、花々亭のオッベケベじゃないですか。

あんり　自転車を飛ばして、買ってきたんです。

鈴江　私、和菓子は苦手なのよ。子供の頃からあんこが食べられなくて。

あんり　え？

美波　（鈴江に）すみませんでした、気がつかなくて。

恭一　じゃ、これは俺が処分します。（と和菓子に手を伸ばす）

あんり　（恭一の手を叩いて）買ってきたのは私です。

鈴江　恭一、アンディの絵が見たいんだけど。

恭一　わかりました。あんりちゃん。

あんり　はい、ただいま。

あんりが和菓子を持って去る。

恭一　なぜ持っていく。
美波　（鈴江に）あの、一つ質問してもよろしいですか？
鈴江　どうぞ。
美波　こんなことを聞いたら失礼になるかもしれませんけど、ご主人とはどこで知り合ったんですか？　日本ですか、アメリカですか？
鈴江　タブロイド・ジャーナリズムのような質問ね。
美波　タブロイド？
恭一　日本で言ったら、夕刊フジとか日刊ゲンダイとか。
鈴江　アンディと出会ったのは、ニューヨークです。場所は、メトロポリタン美術館。私もアンディーも、一度目の結婚に失敗して、新しいパートナーを探してたの。
美波　ご主人は、その頃はもう有名だったんですよね？
鈴江　私は彼のファンだった。でも、出会った次の日には、彼が私のファンになったの。
恭一　私のファン。プププ。
鈴江　何がおかしいの？
恭一　いいえ、別に。

そこへ、あんりが戻ってくる。手には布をかけたキャンバス。

あんり　武田さん。（とキャンバスを差し出す）
美波　（受け取って）ありがとう。（鈴江に）昨日、この画廊に持ち込まれたものです。武田君は一億の値段をつけたんですが。（と布を取る）
鈴江　（絵を見る）
美波　あの、これは、ご主人が描かれたものですよね？　贋作じゃないですよね？
鈴江　（英語で）いいえ、これは贋作です。
恭一　（英語で）そんなはずはない。
美波　え？　え？　奥様はなんて仰ったの？
あんり　「贋作です」って言ったんですよ。そしたら、武田さんが「そんなはずはない」って。
美波　あんりちゃんて、見かけに寄らず、英語ができるのね。
鈴江　行きましょう、恭一。
恭一　どこへ。
鈴江　鎌倉。すぐに車を出して。
美波　武田君、この絵はどうするのよ。朝からずっと買い手を探してたのに。
恭一　そのまま続ければいいでしょう。その絵は間違いなく真作なんだから。
美波　でも、奥様は———
恭一　ただし、売るのはまだ待ってください。山名が取りに来ても、絶対に渡さないでください。いいですね？
鈴江　（英語で）恭一、早く。
恭一　（英語で）はいはい、わかってますよ、スージー。
美波　スージー？

美波とあんりが去る。

恭一と鈴江が車に乗る。車が走り出す。

恭一　鎌倉ってことは、健成君の実家ですか？　僕は住所を知りませんよ。
鈴江　近くまで行ったら、私が道を教えます。
恭一　急に機嫌が悪くなりましたね。あの絵がそんなにお気に召さなかったんですか？
鈴江　悪いけど、話をしたくないの。しばらく静かにしてて。
恭一　わかりました。あ、電話だ。失礼。（と携帯電話を取り出す）

別の場所に、倫太郎が現れる。

恭一　もしもし。
倫太郎　恭一か、俺だ。
恭一　今、運転中なんだ。また後でかけてくれ。
倫太郎　切るな。今川健成について、とんでもない事実が判明したんだ。聞きたくないのか？
恭一　聞きたくない。
倫太郎　俺は聞かせたい。実は、今川の父親は、去年の十二月に亡くなってるんだ。

今川が殺したわけじゃないぞ。心臓の病気だ。で、後には莫大な遺産が残されたわけだが、問題は相続税だ。噂によると、その額は三十億。遺産じゃなくて、相続税が三十億だ。どうだ、驚いたか。

恭一　別に。

倫太郎　クソー、やっぱり知ってたのか。

恭一　健成の父親は絵画の蒐集家だったんだ。家には名画の真作がいっぱいある。バブルの頃なら、倍以上の額になったはずだ。

倫太郎　俺の推理はこうだ。今川は相続税を払うために、博打に手を出す。もちろん、勝てるわけがない。遺産を全部使い果たして、一文なしになる。追い詰められた今川は、首を括って死ぬ。唯は若くして、未亡人になるんだ。唯が不幸になるっていうのは、このことなんだろう？

恭一　それは推理じゃない。ただの妄想だ。（と携帯電話を切る）

倫太郎　あ、切るな。

倫太郎が消える。

恭一　すいませんでした。すぐに切ろうと思ったんですが。

鈴江　今、「健成の父親」って言ったわね？

恭一　いや、何かの聞き間違いじゃないですか。

鈴江　あなた、健成とは親しいの？

恭一　いいえ、今日会ったのが初めてです。

鈴江　そのわりに、いろいろ知ってるじゃない。確かに、あの子の父親は絵が好きだった。若い頃は画家を目指してたのよ。私の目から見ても、なかなかの才

恭一　能だった。
鈴江　ミセス・ワトソンが言うんだ。信じますよ。
恭一　でも、彼は長男だったから、家業を継がなければならなかった。
鈴江　それで、絵を描くことより、集めることを選んだわけですか。
彼のコレクションは、昼間行った美術館に負けてないわ。あなたが目をつけたのもよくわかる。
恭一　目をつけるって？
鈴江　正直に言いなさい。あなたは健成の父親のコレクションを狙ってる。だから、私のガイドを買って出たんでしょう？
恭一　違いますよ。
鈴江　それとも、もっと前から？　唯が健成に近づいたのも、あなたの差し金？
恭一　いい加減にしてください。
鈴江　何よ。図星を指されて、怒ったの？
恭一　唯は絵のことなんか、何も知らない。健成君に本気で惚れてるんです。僕はむしろ、結婚には反対なんだ。
鈴江　じゃ、なぜ私のガイドを引き受けたの。
恭一　運命です。僕は今日、あなたと出会う。そう決まっていたんです。

一時間後。鎌倉にある、今川邸。絹代と理香がやってくる。

絹代　ずいぶん早く来たわね。歓迎会は七時からよ。
鈴江　ちょっと用事があってね。健成はいる？
絹代　まだ来てないわ。私はてっきり、姉さんと一緒だと思ってた。

鈴江　ああ、観光ガイドね？　健成から何も聞いてないの？
絹代　ええ。
鈴江　私が断ったのよ。健成も唯も、絵についてはほとんど素人だし、英語も中学生レベル。あんなのと美術館に行ったら、私がガイドをする羽目になる。
絹代　姉さんは要求が高すぎるのよ。自分に関わるものは何でも一流じゃないと気が済まないんだから。
鈴江　で、二人が連れてきてくれたのが、この人。（と恭一を示して）一流とは言えないけど、まずまずのガイドぶりだった。
恭一　（絹代に）初めまして、武田恭一です。武田唯の兄です。
絹代　ああ、唯さんの。
鈴江　（恭一に）この人は、私の妹の絹代。健成の母親。
絹代　（恭一に）健成がいつもお世話になっています。
恭一　いや、僕はお世話なんてしてません。これからする可能性はかなりありますが。
絹代　今日はどちらへ行ったんですか？
恭一　お台場現代美術館です。あと、僕の知り合いが経営してる画廊が横浜にありまして――
鈴江　そこでちょっとおもしろいものを見たのよ。
絹代　おもしろいもの？
鈴江　絹代、アンディの絵はどこにある？
絹代　アンディの？
鈴江　私がチャッズフォードから送った絵よ。アンディが学生時代に描いたやつ。
絹代　ああ、農家の納屋の絵ね？　確か、主人の書斎に飾ってあると思うけど。

鈴江　ここに持ってきてくれない？　今すぐに。
絹代　どうして？　武田さんが見たいって仰ったの？
鈴江　恭一じゃなくて、私が見たいの。早く。
絹代　何よ、急に怖い顔をして。理香さん、行ってきてくれる？
理香　書斎へですか？
絹代　奥に机があるでしょう。その机の上に飾ってある絵を持ってきて。
理香　私一人で？
絹代　一人だと何かまずいことでもあるの？
理香　一週間ほど前の話です。夜中におトイレに行きたくなって、廊下を歩いてたら、あの部屋の中から足音が聞こえたんです。あの足音は、きっと亡くなったおじ様の。いやー！
絹代　それで一人で行くのが怖いってわけ？
理香　ええ。
絹代　そう。じゃ、一人で行ってきて。
理香　はい。

理香が去る。

恭一　今の人は？
絹代　亡くなった主人の妹の娘、つまり、健成の従妹です。この近くの女子大に入ったので、うちから通わせてるんです。
鈴江　（恭一に）理香は健成のお嫁さん候補なのよ。
恭一　（絹代に）本当ですか？

絹代　まあね。あの子が大学を卒業したら、一緒にさせようと思ってるの。
恭一　でも、健成君には唯が。
絹代　あの子が誰とお付き合いしようと、それはあの子の自由です。でも、結婚は別。あの子には、この家を継ぐ責任がありますから。
恭一　健成君はそのことを知ってるんですか？
絹代　もちろん。
鈴江　じゃ、理香は？
絹代　あの子は、この家に来る前に、母親に言い含められたみたい。花嫁修行のつもりで、頑張りなさいって。

そこへ、唯と健成がやってくる。

唯　こんにちは。
絹代　あら、あなたたちも来たの？　まだ二時間近くあるのに。
健成　唯が、歓迎会の準備を手伝いたいって言うんで。
絹代　（唯に）それはどうもありがとう。でも、あなたをご招待した覚えはありませんけど。
健成　僕が招待したんだよ。いいだろう、一人ぐらい。
唯　（絹代に）私、何でもやりますから。料理はわりと得意だし。
恭一　（絹代に）こいつの肉ジャガは絶品ですよ。歓迎会にはあまり似つかわしくないかもしれませんが。
唯　お義兄ちゃんは黙ってて。
健成　（恭一に）僕らより先に来てるとは思いませんでした。叔母がまたワガママ

鈴江　を言ったんですか？　「もう疲れた、昼寝したい」とか。
つまらないジョークはやめなさい。私はあなたに聞きたいことがあったの。
健成　健成、この家に、アンディの絵が一枚あることは知ってるわね？
鈴江　ええ、まあ。
健成　今、どこにある？
絹代　さあ。それって、どんな絵でしたっけ？
健成　農家の納屋の絵よ。お父さんが気に入って、書斎に飾ってたじゃない。
絹代　ああ、あれか。
鈴江　まさか、あなた、またやったの？
絹代　またって？
この子は先月、ホッパーの絵を持ち出したのよ。あの時、あんなに叱ったのに、また同じことをするなんて。どうなのよ、健成！
鈴江　（健成に）答えたくないなら、それでもいいわ。今、理香が取りに行ってるから。
恭一　遅いですね、あの人。怖くて、部屋の中に入れないんじゃないですか？
鈴江　まさか。

そこへ、理香が戻ってくる。

理香　おば様、大変なことが起きました。私が何を言っても、驚かないで聞いてください。
絹代　絵はなかったって言いたいんでしょう？
理香　ええ。きっと亡くなったおじ様が。いやー！

絹代　ご苦労様。もう向こうへ行っていいわ。
唯　健成君、お母さんが言ったことは本当なの？　勝手に絵を持ち出したの？
健成　ああ。
唯　どうしてそんなことを。
健成　君には関係ないよ。
唯　関係ないって、何よ。私には言えないことなの？
絹代　唯さん、あなたは口出ししないでください。これは、今川家の問題です。
健成　オーバーだな、母さんは。いいじゃないか、絵の一枚や二枚。
絹代　健成。
健成　確かに、僕は悪いことをした。それは認めるよ。でも、父さんはもう死んだんだ。この家にある絵は、全部僕のものだよ。
絹代　違うわ。この家のものよ。
健成　母さんに迷惑をかけるつもりはなかった。だから、なるべく高くない絵を選んだんだ。ホッパーの絵だって、五百万にしかならかったし。ワトソンの絵はもっと高いぞ。
恭一　代表作ならね。でも、あの絵は、学生時代に描いた習作です。大した価値はない。
健成　（英語で）もう一度、言いなさい。
鈴江　父に聞きましたよ。伯母さんはあの絵をタダでくれたって。それをいくらで売ろうと、僕の勝手じゃないですか。
健成　鈴江が健成の横っ面を平手で叩く。健成が倒れる。

絹代　姉さん！
鈴江　絹代、今回の話はなかったことにして。
絹代　健成が言ったことは謝るわ。義兄さんの絵も、必ず取り戻すから。
鈴江　帰りましょう、恭一。
恭一　え？　歓迎会はどうするんです。
鈴江　（英語で）キャンセルするに決まってるでしょう。さあ。
恭一　（絹代に）お邪魔しました。

鈴江と恭一が去る。理香が健成に駆け寄る。

理香　大丈夫ですか、健成さん？
健成　ああ。女のくせに、凄い力だ。
絹代　健成、あの絵は今、どこにあるの？
健成　知り合いに譲った。金はまだもらってないけど。
絹代　だったら、まだ間に合うわ。急いで返してもらいなさい。
健成　ダメだよ。僕はその人に売るって決めたんだ。
唯　どうして売らなくちゃいけないの？　お金のため？
健成　今まで隠してて悪かったけど、僕には借金があるんだ。君と結婚する前に、キレイに返してしまいたんだ。
理香　結婚？
絹代　健成、あなた、今、なんて言ったの？
健成　唯と結婚するって言ったんだ。今年の十月に。
絹代　そんな勝手なこと、私が許すと思ってるの？

健成　そのかわり、デザイナーの仕事は辞めて、父さんの会社を継ぐよ。それなら、いいだろう？

理香　（泣き出す）

絹代　理香さんは。理香さんはどうなるのよ。

理香が走り去る。絹代が後を追って、走り去る。唯と健成は反対側へ去る。

恭一と鈴江がやってくる。車に乗る。走り出す。

恭一　ホテルへ真っ直ぐでいいですか？
鈴江　（うなずく）
恭一　夕食はどうします。途中でどこかに寄りますか。
鈴江　（恭一を見る）
恭一　わかりました。口を閉じますよ。下手に逆らって、健成君みたいな目に遭いたくはない。
鈴江　あなたに謝らなくちゃいけないわね、恭一。
恭一　謝るって、何を？
鈴江　私はあなたを疑ってた。健成が絵を持ち出したのは、あなたに唆されたからだ。そう思ってたのよ。
恭一　そいつはとんだ濡れ衣だ。健成君が絵を持ち出したのは、一週間前です。おそらく、理香さんが足音を聞いた夜でしょう。
鈴江　じゃ、あの足音は健成のものだったの？（英語で）バカみたい。
恭一　僕が健成君に会ったのは、今日が初めて。一週間前は、名前さえ知らなかった。僕に唆せるわけないんだ。
鈴江　じゃ、上杉画廊に絵を持ってきたのは？

恭一　山名って男です。健成君を唆したのは、その男なんですよ。
鈴江　でも、なぜよりによって、アンディの絵を。
恭一　健成君は知ってたんですか。あなたが義弟さんのコレクションを買い取りに来ることを。
鈴江　さあ。絹代には十日ほど前に連絡したんだけど。
恭一　じゃ、聞いてなかったって可能性はありますね。後から聞いて、ビックリしたんでしょう。それで、あなたのご機嫌を取るために、ガイドを買って出たんだ。
鈴江　今さら手遅れよ。私はアンディの絵がほしかったの。他の絵はただのおまけに過ぎない。
恭一　しかし、あなたに買ってもらえないと、妹さんは困るんじゃないですか？
鈴江　あの屋敷を売ることになるでしょうね。でも、自業自得よ。健成をあんなふうに育てたのは、絹代なんだから。
恭一　失礼。また電話です。（と携帯電話を取り出す）

別の場所に、倫太郎が現れる。

恭一　もしもし。
倫太郎　切るな。切らないでくれ。
恭一　義兄さん、いい加減にしないと、怒るぞ。
倫太郎　それは、俺の話を聞いてからにしろ。今川健成について、また新たな事実が判明したんだ。
恭一　わかった。三秒だけ時間をやろう。一、二。

倫太郎　実は。
恭一　三秒経った。切るぞ。
倫太郎　恭一、義兄さんをいじめるのがそんなに楽しいか。

倫太郎の横に、節子が現れる。

節子　先生、こんな所で何をしてるんですか。
恭一　（倫太郎に）その声は、小笠原さんか？
倫太郎　ああ。また催促に来たんだ。熱心なのはいいが、こう毎日来られても。
節子　相手は誰です。先生の彼女ですか？
倫太郎　ああ。君と違って、気立ての優しい子だよ。
節子　（倫太郎の手から受話器を奪い取って）先生は今、忙しいんです。電話は当分の間、ご遠慮願います。
恭一　それはこっちの科白だ。（と切る）
節子　男の声。（倫太郎に）ということは、彼女じゃなくて、彼氏？

倫太郎と節子が消える。
二時間後、プリンセスホテルのロビー。

鈴江　今日はどうもありがとう。
恭一　いえいえ。勤務時間中に何度も電話して、すいませんでした。
鈴江　あれさえなければ、百点満点だった。でも、とても楽しかったわ。じゃ、お休みなさい。（と背を向けて歩き出す）

恭一　あの、何か忘れてませんか？
鈴江　私が？　いいえ。
恭一　ほら、僕のギャラ。
鈴江　ああ。それは明日まとめて払います。
恭一　明日まとめて？　それはつまり、明日もガイドをしろってことですか？
鈴江　午前九時にここに来て。
恭一　しかし、僕にもいろいろ都合が。
鈴江　（英語で）お休みなさい、恭一。（と背を向けて歩き出す）
恭一　（英語で）お休みなさい、スージー。（日本語で）クソー。何でもかんでも一人で決めやがって。俺はあんたの召使じゃない。
鈴江　（英語で）何か言った？
恭一　（英語で）いえいえ。いい夢を、スージー。

鈴江が去る。
一時間後。日暮里にある、武田骨董店。弦五郎がやってくる。

弦五郎　お帰り、恭一。
恭一　ただいま。あー、腹が減った。今日の夕食の当番は誰だっけ？
弦五郎　唯だ。この時間まで帰ってこないところを見ると、また出前でごまかすつもりだな。
恭一　あいつは今、忙しいんだよ。
弦五郎　どんなに忙しくても、当番の日は残業しない。そう決めたはずだ。
恭一　義父さん、唯から聞いてないの？

弦五郎　何を。
恭一　唯は結婚するんだ。今年の十月に。
弦五郎　唯が結婚？　相手は誰だ。おまえか。
恭一　違うよ。今川健成って男だよ。
弦五郎　そうか、おまえじゃないのか。あいつは子供の頃から、「大きくなったら、恭一義兄ちゃんのお嫁さんになる」って言ってたのに。
恭一　そうだっけ？
弦五郎　おまえだって、満更でもないって顔をしてたじゃないか。
恭一　子供の頃の唯は可愛かったからな。まさか、あんなに生意気になるとは思わなかった。
弦五郎　覚えてるか。おまえが初めてこの家に来た日。
恭一　もう十八年も前の話だよ。
弦五郎　おまえは十二歳で、唯は七歳だった。唯のやつ、「私が恭一義兄ちゃんのお世話をする」って言い張って。布団を敷いたり、風呂で背中を流したり、まるでコマネズミのように駆けずり回って。おかげで、三十八度も熱を出して、寝込んだんだ。
恭一　唯にはいまだに世話になってるよ。この服だって、唯が選んで、買ってきてくれたんだ。
弦五郎　それがとうとう結婚か。恭一、唯を頼んだぞ。
恭一　だから、唯が結婚するのは俺じゃないの。今川なの。

そこへ、倫太郎がやってくる。

倫太郎　こんばんは。
弦五郎　久しぶりだな、倫太郎。
倫太郎　（袋を出して）これ、お土産です。父さんの好きな、うさぎやのどら焼き。
弦五郎　（受け取って）よし。今日の夕飯は大判焼きだ。恭一、お茶をいれてこい。
倫太郎　悪いけど、自分でいれてきてよ。俺は恭一に話があるんだ。
弦五郎　今川の話か？
倫太郎　（恭一に）話したのか、父さんに。
恭一　　ああ、たった今。
倫太郎　（弦五郎に）じゃ、父さんも一緒に聞いてよ。今川は三年前に、友達と会社を作ったんだ。でも、去年ぐらいから危なくなってきて、知り合いに借金をした。ところがなんと、一緒に会社を作った友達が、その金を持ち逃げしたんだ。
弦五郎　金額は。
倫太郎　一千万。友達はいまだに行方不明。借金は全部、今川が抱えることになった。
弦五郎　世の中にはひどいやつがいるもんだな。そんなやつを信じた、今川にも問題はあるが。
倫太郎　（恭一に）俺の推理はこうだ。今川は唯と二人で夜逃げする。しかし、金融業者が雇ったヤクザは、二人を執拗に追いかけてくる。そして、北海道の納沙布岬で、二人はついに捕まる。今川は唯を逃がすために、ヤクザに飛びかかる。ヤクザは今川を拳銃を撃つ。唯は若くして未亡人になるんだ。唯が不幸になるっていうのは、このことなんだろう？
弦五郎　おまえってやつは、推理作家のくせに、そんな推理しかできないのか。

そこへ、唯がやってくる。

唯　ただいま。

弦五郎　遅かったな、唯。

唯　あれ？　倫太郎兄ちゃんがいる。今日は何の用？

倫太郎　おまえに話があって来たんだ。そこに座れ。

唯　お説教なら、聞きたくない。

倫太郎　俺はおまえのことを心配して言ってるんだぞ。

唯　はっきり言って、迷惑。私が誰と結婚しようと、倫太郎兄ちゃんには関係ないでしょう？

倫太郎　関係ないとは何だ。兄貴に向かって。

唯　倫太郎兄ちゃんに、私を責める資格はない。お父さんの跡を継がないで、作家になって。お父さんは反対したのに。

倫太郎　でも、今は応援してくれてる。そうだよね、父さん？

弦五郎　俺は、倫太郎の小説が大好きだ。すぐに犯人がわかるから。

倫太郎　（唯に）ほら、見ろ。

唯　倫太郎兄ちゃんは努力して、プロの作家になった。だから、お父さんも認めたのよ。私だって、努力する。健成君と二人で、幸せな家庭を作る。

恭一　それは無理だ。

唯　どうしてよ。

恭一　健成には借金がある。一千万も。

唯　知ってるよ。健成君に聞いた。

恭一　その借金は、健成が友達に騙されてできたものだ。おまえから見たら、優し

唯　い人なのかもしれない。しかし、実際はお人好しの、お坊ちゃんなんだ。
恭一　お人好しのどこがいけないの？　健成はこれから先も他人に騙され続ける。そのたびに、苦労するのはおまえなんだ。
唯　どうしてそうやって決めつけるの？　また、いつもの勘？
恭一　そうだ。
唯　やめて。そんな話、もう聞きたくない。
倫太郎　唯、恭一も俺と同じなんだ。おまえのことが心配なんだ。
唯　恭一義兄ちゃんに、私の気持ちはわからない。
倫太郎　そんなことはない。おまえのことが一番わかってるのは、恭一なんだ。
唯　じゃ、恭一義兄ちゃんは一度でも人を好きになったことがある？　本気で好きになったことが。
倫太郎　（恭一に）どうなんだ？
恭一　あるさ、もちろん。
唯　嘘よ。恭一義兄ちゃんは、ただ付き合うだけ。一緒に映画を見て、ご飯を食べるだけ。相手との間に線を引いて、絶対に中に入れない。自分からも入らない。
恭一　その方がいいんだ。お互いに傷つかずに済む。
唯　でも、人を好きになるのは別。本気で好きになったら、相手の苦しみは、自分の苦しみなの。健成君が苦しい時は、私も苦しいの。
恭一　そんなの、ただの思い込みだ。
唯　最初は、健成君が助けくれたの。私が職場のことで悩んでる時に、一緒になって悩んでくれたの。同情なんかじゃなくて、本気で。

恭一　俺だったら、一緒に悩んだりはしない。「しっかりしろ」って、叱り飛ばすだろうな。

唯　恭一義兄ちゃんにはわからないのよ。恭一義兄ちゃんは強いから。

恭一　それは違う。俺は決して強くない。義父さんや義兄さんがいなかったら、今日まで生きてこられなかった。

倫太郎　唯の名前が抜けたぞ。

恭一　もちろん、唯もだ。おまえがいなかったら、俺は生きてこられなかった。

唯　嘘よ。

倫太郎　おい、唯！

唯が走り去る。

倫太郎　恭一、唯を追いかけよう。

恭一　大丈夫だよ。あいつは健成のマンションに行ったんだ。

倫太郎　じゃ、今夜は泊まるつもりなのか？　結婚前の男女が、一つ屋根の下で？

弦五郎　兄さんは絶対に許さないぞ。

恭一　恭一、唯は本当に不幸になるのか。

五年後、健成は、一緒に会社を作った友達と同じことをする。唯を残して、行方不明になるんだ。後には莫大な借金だけが残る。それでも、唯は待つ。死ぬまで、健成の帰りを待ち続けるんだ。

恭一・倫太郎・弦五郎が去る。

一時間後。高円寺にある、健成のマンション。唯と健成がやってくる。

唯　ごめんね、こんな時間に。

健成　別に構わないよ。でも、今、来客中でね。すぐに帰ってもらうから、ここで待ってて。

唯　来客って、誰？

健成　ははあ、その顔は女じゃないかって疑ってるな？　違うよ、男だよ。仕事でいろいろお世話になってる人なんだ。

そこへ、山名とヒロトがやってくる。

山名　今川さん、その人は？

健成　僕の友人です。これから二人で話があるんで、続きは明日にしてもらえますか。

山名　そういうわけには行きません。先にこっちの話を片づけてもらわないと。

健成　でも、もうこんな時間ですし。

山名　（唯に）お名前は？

唯　武田唯です。

山名　今川さんとはいつ頃からお付き合いを？
唯　なぜそんなことを聞くんですか？
山名　あなたに興味を持ったからですよ。いけませんか？
健成　山名さん、彼女は関係ないでしょう。
山名　今のところはね。しかし、あなたが僕の頼みを断ったりしたら、関係ないとは言えなくなるかもしれない。
健成　それは脅迫ですか。
山名　とんでもない。僕は、あなたに貸した金を返してほしいだけです。
健成　彼女の前で、その話はやめてください。
唯　（山名に）あなたは金融会社の方ですか？
山名　違いますよ。僕もあなたと同じ。今川さんの友人です。
唯　彼はあなたにいくら借りてるんですか？
ヒロト　一千万だ。
健成　それは最初の金額でしょう？　ホッパーとワトソンで、ほとんど返し終わったはずだ。
ヒロト　ホッパーは五百万、ワトソンは三百万にしかならなかった。まだ二百万残ってる。
山名　（健成に）あなたの家にはまだたくさんの絵があるはずだ。僕はそれを全部よこせと言ってるんじゃない。あと一枚。一枚だけでいいんです。
健成　だから、それは無理なんですよ。伯母が来てしまったから。
山名　伯母さんだって、何から何まで買い取るつもりはないでしょう。コレクションの中には、あまり価値のないものもあるだろうし。それを持ってくればいいじゃないですか。

唯　（ヒロトに）今、「ワトソンは三百万にしかならなかった」って言いましたよね？

ヒロト　ああ。

唯　その金額に間違いはありませんか？

ヒロト　間違いない。横浜の画廊がつけた値段だ。

唯　ワトソンの絵は、その画廊に売ったんですか？

ヒロト　いや、預けてあるだけだ。今は、買い手を探してるところだろう。

唯　その画廊の名前を教えてください。

山名　なぜです。

唯　明日行って、絵を買い戻すんです。三百万ぐらいなら、貯金を下ろせば何とかなるから。

ヒロト　三百万で買ったものを、三百万で売るバカがいるかよ。倍の六百万、いや、下手をすると、一千万出せって言われるかもな。

唯　じゃ、あなたたちも一緒に行ってください。

ヒロト　俺たちも？

唯　行って、絵を返してもらうんです。預けてあるだけなら、ただで返してもらえるでしょう？

ヒロト　そんなことをしたら、借金がまた五百万に戻るぞ。おまえにそんな金があるのか？

唯　父に頼んで、貸してもらいます。あなたたちだって、現金で返してもらった方が楽でしょう？　さあ、画廊の名前を教えてください。

山名　お断りします。

唯　どうしてですか。

山名　あの絵はもう僕のものだ。今川さんに返すつもりはない。
唯　でも、あの絵がないと、困るんです。彼の伯母さんは、あの絵が一番ほしかった。あの絵がないなら、コレクションは買い取らないとまで言ってるんです。
山名　それは僕には関係ないことです。
唯　本当に三百万なんですか？
ヒロト　どういう意味だ。
唯　ワトソンの絵は、代表作なら一億の価値があるって聞きました。あの絵も、本当はそれぐらいの価値があるんじゃないですか？
山名　あなたは僕が嘘をついていると？
唯　最初のホッパーだって、本当はもっと高く売れたんじゃないですか？　だとしたら、健成君はとっくの昔に借金を返し終わってるってことになりますよね？
山名　それ以上、侮辱すると、怒りますよ。
唯　侮辱かどうかは、画廊に行けばわかります。さあ、画廊の名前を教えてください。
ヒロト　おまえ、いい加減にしろよ。（と唯につかみかる）
健成　やめろ！
健成がヒロトの肩をつかむ。ヒロトは健成を振り払い、顔を殴る。健成が倒れる。唯が健成に駆け寄る。
唯　健成君！

健成　大丈夫だよ、これぐらい。
唯　（ヒロトに）ひどいじゃない。健成君はあなたを止めようとしただけなのに。
ヒロト　黙れ。
唯　私が言ったことは全部正しかったのね？　だから、怒ったんでしょう？
ヒロト　あんまりナメた口をきくと、おまえも同じ目に遭うぞ。
唯　やれるもんなら、やってみなさいよ。
健成　唯！
山名　なかなか元気なお嬢さんだな。ますます興味が湧いてきましたよ。
健成　やめろ。唯に手を出すな。
山名　出されたくなかったら、もう一枚、絵を持ってきてください。そうだ。あなたの家にはドガがあるって言ってましたよね？
健成　応接間に飾ってあります。母の一番のお気に入りなんで。
山名　すばらしい絵なんでしょうね。じゃ、最後の一枚はそのドガにしましょう。
唯　ドガのかわりに、五百万を持っていきます。だから、画廊の名前を教えてください。
ヒロト　わからない女だな。山名さんは断るって言っただろう。
山名　帰ろう、ヒロト。（健成に）期限は一週間です。一週間後に、またお邪魔しますよ。
健成　山名さん、待ってください。
ヒロト　一週間だ。忘れるなよ、唯。

山名とヒロトが去る。

唯　誰が呼び捨てにしていいって言った？

唯と健成が去る。

一時間後、倫太郎のマンション。恭一と倫太郎がやってくる。

恭一　じゃ、俺はこれで帰るよ。

倫太郎　そう言わずに、コーヒーぐらい飲んでいけ。家まで送ってくれた、お礼だ。

恭一　いいよ。明日の朝も早いし。

倫太郎　明日は何だ。

恭一　またガイドだよ。ミセス・ワトソンの。

倫太郎　へえ。おまえ、よっぽど気に入られたみたいだな、その伯母さんに。

恭一　別にそういうわけじゃない。彼女は上杉画廊に行きたいんだ。

倫太郎　絵を取り戻すためか？

恭一　ああ。

そこへ、節子がやってくる。

節子　すいません、おトイレをお借りしてました。

倫太郎　小笠原君、まだいたの？

節子　もちろん。今日はタイトルが決まるまで帰らないと言ったはずです。

倫太郎　でも、もう十時過ぎだよ。ご両親が心配してるんじゃない？

節子　心配したのは、私の方です。「ちょっと、東スポを買ってくる」って出かけたまま、一時間経っても二時間経っても帰ってこない。事故にでも遭ったん

倫太郎　じゃないかって、気が気じゃありませんでした。近所のコンビニに行ったら、売り切れててね。仕方ないから、ちょっと足を伸ばしたんだ。実家まで。

節子　で、東スボは？

倫太郎　よく考えたら、実家で東スボを売ってるわけないんだよね。

節子　先生を信じた、私がバカでした。こうなったら、今夜はここに泊まらせていただきます。

倫太郎　冗談じゃない。君は嫁入り前の娘だし、僕は婿入り前のおじさんなんだよ。

説子　もう期日を一週間も過ぎてるんです。明日の朝が最終リミットなんです。

倫太郎　仕方ないな。じゃ、コーヒーをいれてきてくれ。

節子　また逃げるつもりじゃないでしょうね？

倫太郎　今度という今度は、答えを出す。だから、早く。

節子が去る。

倫太郎　恭一。

恭一　わかってるよ。今から二十年後、二〇二二年に読んだ小説だ。舞台は安政五年の江戸。井伊直弼が大老となり、安政の大獄が始まった頃。下町で次々と起こる殺人事件。その解決に乗り出したのは、小石川の試衛館に通う、当時十五歳の少年剣士・沖田総司。タイトルは、『沖田総司少年の事件簿』。

倫太郎　それ、もらった。そのネタで行こう。

恭一　二〇二二年のベストセラーだ。うまく書けば、きっと売れる。

倫太郎　おまえはいつもそう言うけど、ベストセラーになった試しはないぞ。

恭一　それは、義兄さんの実力不足だろう。
倫太郎　クソー。そう言われるのがイヤだから、自分の考えたネタで書きたかったんだ。
恭一　でも、俺が教えてるのは、ネタだけじゃないか。細かい部分は全部、義兄さんが考えてる。それでそれなりに売れてるんだから、自信を持っていいんじゃないかな。
倫太郎　しかし、俺にネタを盗まれた作家はどうなる。歴史が変わって、その小説は書かないことになるわけだろう？
恭一　一作ぐらい、なんてことないさ。同じ作家からは二度、盗まないことにしてるし。
倫太郎　歴史を変えても、大して影響はないってことか。
恭一　たぶんね。
倫太郎　唯と健成はこれからどうなるんだ。
恭一　ミセス・ワトソンに必死で頼む。あの絵のことは諦めてほしいって。しかし、彼女は聞き入れない。俺と二人で、上杉画廊に行く。そこで、山名に会うんだ。
倫太郎　いよいよ対決か。
恭一　いや、そこで、俺が間に入る。ミセス・ワトソンに、あの絵を一千万で買い取るように勧めるんだ。
倫太郎　山名が一千万で承知するか？
恭一　「承知しなければ、警察に訴えるぞ」って脅すんだ。それで、何とか事件は解決。唯は健成と無事に結婚するってわけさ。
倫太郎　ということは、明日の上杉画廊が、勝負の分かれ目だな？

恭一　勝負って？
倫太郎　恭一、明日は俺も行くぞ。
恭一　どこへ。
倫太郎　上杉画廊だ。俺はおまえの邪魔をする。話を決裂させるんだ。そうすれば、唯は健成と結婚できなくなる。
恭一　そんなことをして、唯がもっとひどい男と結婚することになったら、どうするんだ。
倫太郎　ほら、携帯が鳴ってるぞ。
恭一　わかってるよ。（と携帯電話を取り出す）

別の場所に、美波が現れる。

恭一　もしもし。
美波　あ、武田君？　上杉です。また頼まれてほしいことがあるんだけど、いいかな？
恭一　明日、上杉画廊に来いっていうんでしょう？
美波　そうなのよ。さっき、山名さんから電話があって、「絵を引き取りたい」って言うの。「まだ買い手は見つかってない」って言ったんだけど、「自分で探すから、もういい」って。
恭一　わかりました。ミセス・ワトソンとお伺いします。
倫太郎　（携帯電話に向かって）僕も行きます。
美波　今のは誰？

恭一と倫太郎が去る。美波も消える。

五月三日朝、プリンセスホテルのロビー。鈴江がやってくる。後を追って、唯と健成がやってくる。

健成　待ってください、伯母さん。お願いですから、僕の話を聞いてください。

鈴江　あなたの相手をしてる暇はないの。もうすぐ、恭一が迎えに来るんだから。

健成　五分でいいんです。五分経ったら、帰りますから。（と鈴江の前に立つ）

鈴江　そこをどきなさい。

健成　伯母さん。

鈴江　そこをどけと言ってるのが聞こえないの？　健成。

健成　お願いします、伯母さん。

唯　（鈴江に）私からも、お願いします。昨日のことは、健成君も反省してるんです。彼に、もう一度チャンスをあげてください。

鈴江　チャンスですって？（健成に）じゃ、あなたはもうアンディの絵を取り戻したの？

健成　いいえ、それはまだ。

鈴江　だったら、チャンスなんて言葉を口にする資格はない。それなのに、私の前にイケシャーシャーと顔を出して。あなたには恥という観念がひとかけらもないようね。

唯　健成君だって、努力したんです。でも、山名って人は全然相手にしてくれなくて。

鈴江　それで、取り戻すのは諦めたっていうの？

唯　諦めたわけじゃありません。これからも努力は続けます。時間はかかるかもしれないけど、必ず取り戻します。だから、健成君を許してあげてください。

鈴江　その科白はあなたが言うべきじゃない。健成が言うべきよ。悪いのは全部、健成なんだから。

健成　すいませんでした、伯母さん。

鈴江　唯さんに一つ、忠告しておくわ。結婚というのは、一生の問題よ。相手はもっと慎重に選ぶべきね。

唯　わかってます。

そこへ、恭一と倫太郎がやってくる。

倫太郎　（英語で）おはようございます、スージー。

鈴江　（英語で）おはよう。（日本語で）恭一、この人は誰？

恭一　僕の義兄の倫太郎です。自分もガイドをしたいって言い張りまして。

鈴江　ガイドは恭一一人で十分よ。

恭一　だってさ、義兄さん。

倫太郎　（鈴江に）確かに、恭一はガイドとして申し分のない男です。しかし、僕は恭一にないものを持っている。明るい笑顔。楽しいユーモア。そして、圧倒的な文学の知識。何しろ、僕はプロの作家ですから。

鈴江　今のを英語で言ってみて。

倫太郎　あーん。（と考える）
鈴江　不合格。
倫太郎　そう言わずに、僕もお供させてください。ギャラはいりませんから。
鈴江　それなら、合格。
倫太郎　本当ですか？　ありがとうございます、ミセス・ワトソン。
唯　一体何を企んでるの？
倫太郎　別に。
唯　隠しても無駄よ。私の結婚を妨害するつもりなんでしょう？　伯母さんに、私の悪口を吹き込もうっていうのね？
倫太郎　バカ。誰がそんな下らないことを。
唯　じゃ、どうしてガイドをやる気になったのよ。
恭一　兄貴は、山名に話があるんだ。
唯　山名？　恭一義兄ちゃん、どうして山名さんのこと、知ってるの？
恭一　会ったんだよ。一昨日の夕方、俺の知り合いの画廊で。山名はそこへ絵を持ってきたんだ。
健成　絵って、まさか。
恭一　そうだ。君の伯父さんの絵だ。
唯　どうして今まで黙ってたの？
恭一　おまえが聞かなかったからさ。
唯　その画廊はどこにあるの？　教えて。
鈴江　（英語で）行きましょう、恭一。
恭一　（英語で）オーケイ。（日本語で唯に）悪いが、ミセス・ワトソンがお待ちなんだ。

唯　ねえ、お義兄ちゃん。
恭一　何でもかんでも、人に頼ろうとするな。そいつと二人で調べればいいだろう。
唯　もう時間がないのよ。
恭一　こっちももう出発の時間だ。じゃあな。
倫太郎　（英語で）頑張れよ、唯。

唯と健成が去る。恭一・鈴江・倫太郎が車に乗る。車が走り出す。

恭一　今日はどこへ。
鈴江　上杉画廊。
倫太郎　ご主人の絵を取り戻しに行くんですね？　それならそうと、健成君に教えてあげればよかったのに。
鈴江　あの子がしたことは、泥棒と同じです。だから、もっと苦しめてやらないと。
倫太郎　でも、結局は許してあげるんでしょう？
鈴江　反省して、心を入れ換えたらね。
恭一　ご主人の絵が取り戻せるかどうかはまだわかりませんよ。
鈴江　なぜよ。あの絵は、私の義妹のものよ。
恭一　しかし、山名はあの絵を借金のカタとして手に入れた。つまり、三百万で買ったんです。当然、あなたにも金を要求してくるでしょうね。
鈴江　お金なんか、びた一文払うもんですか。
恭一　じゃ、交渉は決裂だ。
倫太郎　いいぞいいぞ。
鈴江　私はあの絵をアンディが描いたものとは認めません。私が認めない限り、あ

倫太郎　の絵はただの贋作なの。三百万どころか、三十万の価値もない。そうと知ったら、向こうも諦めるでしょう。

恭一　それは残念。

鈴江　（鈴江に）僕はあの絵に一億の値をつけました。これは安いですか、高いですか。

恭一　それは見る人によって、違うでしょう。

鈴江　あなただったら？

倫太郎　一億でも安いぐらい。

鈴江　そんなに凄い絵なんですか？

倫太郎　いいえ。絵としては大した出来じゃない。何しろ、学生時代に描いた絵だから、全盛期に比べたら一段も二段も落ちる。でも、私にとっては、特別な絵なのよ。

倫太郎　わかった。ミセス・ワトソンのヌードが描いてあるんでしょう？

鈴江　楽しいユーモアの持ち主じゃなかったの？

倫太郎　すいません。次こそは必ず。

鈴江　恭一、あなた、唯と喧嘩してるの？

恭一　ええ、まあ。

鈴江　原因は、結婚問題？

倫太郎　こいつも僕も、結婚には反対なんですよ。でも、唯のやつ、全然聞く耳を持たなくて。

鈴江　私も口は悪い方だけど、さっきの恭一はもっと凄かった。あんな言い方をしたら、唯だって反発したくなるでしょう。

倫太郎　確かに。僕も時々、唯がかわいそうになります。

鈴江　（恭一に）もしかして、唯が好きなの？

恭一　バカなことを言わないでください。あいつは僕の義妹ですよ。

鈴江　でも、唯に聞いたわ。本当の兄妹じゃないって。

恭一　あのバカ、余計なことをしゃべりやがって。

倫太郎　（鈴江に）僕と唯は実の兄妹です。恭一だけ、親が違うんですよ。恭一の父親は僕の父親の弟。つまり、恭一は僕らの従兄弟だったんです。

鈴江　じゃ、恭一はあなたの家の養子になったの？

倫太郎　こいつが十二の時に。その年の五月一日に、こいつの両親が亡くなったんです。こいつの父親は印刷会社を経営してたんですが、その前の月に倒産してしまいまして。負債は五億だったか、十億だったか。とにかく、一生かかっても返せないほどの借金をかかえて、父親も母親も絶望したんですね。一家心中を図ったんです。

恭一が立ち上がる。鈴江と倫太郎が去る。

恭一　五月一日の朝、父さんが突然、「ドライブに行こう」と言い出した。ドライブなんて一度もしたことがなかったので、僕はとてもうれしかった。目的地は伊豆半島。お昼過ぎに家を出て、夕方には下田に着いた。でも、車は止まらない。海沿いの道を走り続ける。やがて、父さんが、「今夜はホテルに泊まろう」と言った。僕は替えの下着を持ってこなかったので、反対した。すると、父さんは急に不機嫌になって、「下着ぐらい、ホテルで買えばいいだろう」と怒鳴った。母さんはずっと黙っていた。僕はだんだん不安になってきて、ずっと外を見ていた。そして、いつの間にか、眠ってしまった。と、

突然、誰かの叫び声が聞こえて、目を覚ました。フロントガラスに星空が見えた。が、次の瞬間、星が消えた。

車が海に飛び込む音。恭一の動きが止まる。周囲の明かりが点滅する。
十三年前の五月一日夕。武田骨董店。倫太郎がやってくる。

倫太郎　恭一？　恭一？
恭一　え？
倫太郎　大丈夫か？　俺が誰か、わかるか？
恭一　倫太郎さん？
倫太郎　そうだ。倫太郎だ。
恭一　ここは？
倫太郎　俺の家だ。おまえも何度か来たことがあるだろう。
恭一　うん。でも。
倫太郎　どうした。
恭一　僕は車に乗ってたんだ。父さんと、母さんと。
倫太郎　そうだな。みんなで、ドライブに行ったんだろう？
恭一　うん。でも、僕、途中で寝ちゃって。
倫太郎　目が覚めたら、ここにいたのか？
恭一　ううん。誰かの叫び声が聞こえたんだ。で、目を開けたら、前のガラスに星がいっぱい見えて。まるで、空でも飛んでるみたいだった。
倫太郎　それから？
恭一　それから、急に星が消えた。車が何かにぶつかったんだ。あれ、何だったん

だろう。よくわからないけど、真っ黒だった。

倫太郎　海だよ。車は海に落ちたんだ。

恭一　そうなの？　でも、それから先は覚えてない。気がついたら、ここにいた。

倫太郎　倫太郎さんの声が聞こえた。

恭一　そうか。海に落ちた瞬間に、スキップしたんだな。

倫太郎　スキップ？

恭一　いや、何でもない。

倫太郎　父さんと母さんは？

恭一　恭一、俺がこれから話すことは、おまえにはちょっと難しいかもしれない。ちゃんと理解するまで、時間がかかるかもしれない。しかし、おまえはもう十二歳だ。じっくり考えれば、きっとわかる。だから、落ち着いて、よく聞くんだ。いいな？

倫太郎　うん。

恭一　今日は一九八九年の五月一日。おまえがドライブに行った日から、ちょうど五年後なんだ。

倫太郎　五年後？

恭一　そうだ。信じられないのは、よくわかる。しかし、自分の手を見てみろ。体を見てみろ。十二歳だった時より、大きくなってるだろう。

倫太郎　本当だ。

恭一　おまえの体はもう十七歳なんだ。おまえは五年分の時間を、一瞬で跳んでしまったんだ。

倫太郎　え？

恭一　理由はよくわからない。もちろん、最初に跳んだのは、事故のショックから

逃れるためだろう。しかし、それ以外のスキップは、何の前触れもなくやってくるんだ。

恭一　スキップ？

倫太郎　時間を跳ぶから、スキップさ。これは、おまえがつけた名前だ。

恭一　僕が？

倫太郎　おまえは毎年五月一日が来るたびに、スキップする。次にどの年に行くか、スキップするまではわからない。順番はデタラメだ。おまえはこれから先、人生をデタラメな順番で生きるんだ。

恭一　よくわからないよ。

倫太郎　焦るな、恭一。慌てて理解する必要はない。次のスキップまで、まだ一年あるんだから。

恭一　倫太郎さん、僕、怖いよ。

倫太郎　ああ、怖いだろう。俺がおまえの立場だったら、怖くて泣き叫ぶかもしれない。しかし、これだけは忘れるな。俺はおまえのそばにいる。これから先、ずっとだ。だから、生きろ。絶望しないで。

恭一　父さんと母さんは？　ねえ、父さんと母さんは？

そこへ、弦五郎がやってくる。

弦五郎　どうした、恭一。

恭一　伯父さん。父さんと母さんはどこ？

弦五郎　心配するな。父さんと母さんはまだドライブ中だ。そのうち、帰ってくるさ。

恭一　伯父さん、僕……。

弦五郎　心配するな。二人が帰ってくるまでは、俺がおまえの父さんだ。

恭一・倫太郎・弦五郎が去る。

三時間後。上杉画廊。美波・山名・ヒロトがやってくる。

美波　（奥に向かって）あんりちゃん、例の絵を持ってきて！
山名　すいませんでしたね、突然の話で。
美波　正直言って、驚きました。お約束は一週間のはずでしたが。
山名　ちょっと事情が変わりましてね。あの絵は大阪で売ることにしたんです。
美波　どうして大阪で？　ひょっとして、警察に嗅ぎつけられたとか？
ヒロト　あんた、あの絵が盗んだものだと思ってるのか？
美波　冗談ですよ。本気にしないでください。
山名　昔の知り合いが大阪にいましてね。そいつにあの絵のことを話したら、ぜひ買い取りたいと言ってきたんです。
美波　おいくらで？
山名　もちろん、一億です。で、あの絵は？
美波　（奥に向かって）あんりちゃん、まだ？

そこへ、あんりがやってくる。手には布をかけたキャンバス。

あんり　お待たせしました。（とキャンバスを差し出す）

美波　（受け取って）ありがとう。（山名に）一応、確かめますか？
山名　もちろん。
美波　私たちもプロですから、丁重に扱うようにしてました。傷も剥落もないと思いますけど。（と布を取る）
山名　何回見ても、いい絵だ。じゃ、確かに受け取りましたよ。ヒロト。
ヒロト　はい。（とキャンバスに手を伸ばす）
美波　その前に、一つ、ご相談があるんですが。
ヒロト　何だよ。
美波　（山名に）私たちは、この三日間、死に物狂いで買い手を探したんです。ねえ、あんりちゃん？
あんり　うちのお得意さん全員に電話しました。全部で五十人ぐらい。
美波　五百人よ。（山名に）そのうちの何人かの方は、「ぜひ絵を見てみたい」と言ってくださったんです。
ヒロト　そいつらには、一億って言ったのか？
美波　ええ。さすがに皆さん、「高い」って仰いました。でも、少し値段を落とせば、すぐに売れると思います。なんでしたら、私が交渉しますけど。
ヒロト　（山名に）どうします？
山名　（美波に）いや、やめておきましょう。焦って、損はしたくない。やっぱり、大阪に持っていきますよ。ヒロト。
ヒロト　はい。（とキャンバスに手を伸ばす）
美波　その前に。
ヒロト　まだ何かあるのか？
美波　もう一度だけ見せてください。この絵を目に焼き付けておきたいんです。

そこへ、恭一・鈴江・倫太郎がやってくる。

恭一　よかった。間に合いましたね。
美波　間に合ってない。私が無理やり、引き止めてたのよ。
山名　あなたは確か、武田さんでしたよね？　僕に何か用ですか。
恭一　あなたに紹介したい人がいましてね。こちらは、ミセス・ワトソン。その絵の作者、アンドリュー・ワトソンの未亡人です。
山名　（鈴江に）ほう、あなたが。
倫太郎　僕は、武田倫太郎。恭一の義兄です。
恭一　義兄さんは関係ないだろう。ほら、向こうへ行って。
鈴江　（山名に）健成がいろいろお世話になったようね。
山名　いえいえ。今川さんには、こんなにすばらしい絵を譲っていただいて、感謝しています。
鈴江　残念だけど、この絵は私のものよ。私が義妹から買い取ることになってたの。
山名　そうでしたか。しかし、今は僕のものです。どうしてもと仰るなら、お譲りしますが。
鈴江　あなたにあげるお金は一銭もないわ。
山名　じゃ、商談は不成立ですね。上杉さん、その絵を返してください。
美波　え？　でも。
ヒロト　何してるんだよ。早くよこせ。
美波　武田君、どうすればいいのよ。
倫太郎　素直に渡した方がいい。そうしないと、銃で撃たれますよ。

ヒロト　俺は銃なんか持ってない。
鈴江　山名さん、その絵を持っていきたければ、ご自由にどうぞ。ただし、私はその絵を主人の作品とは認めませんから、そのつもりで。
山名　どういう意味です。
鈴江　その絵はただの贋作になるのよ。そうなったら、誰も買おうとはしない。あなたのしたことは全部無駄になるのよ。
倫太郎　僕はそうは思いません。
恭一　義兄さんは黙っててくれよ。
倫太郎　いくらで売れるかは、山名さんの腕次第です。僕だったら、あくまでも真作だって主張するな。要は、相手を信じさせればいいんだから。
山名　なるほどね。
恭一　しかし、一億は無理だ。
倫太郎　多少の値引きは必要でしょうね。でも、あんまり安くすると、逆に疑われます。せいぜい五千万。それ以下で売るのは反対です。
美波　あなた、どっちの味方なの？
山名　（倫太郎に）わかった。あんたの言う通りにしよう。（鈴江に）じゃ、僕はこれで失礼します。ヒロト。
鈴江　（英語で）恭一、警察に電話して。
ヒロト　今、なんて言ったんだ。
あんり　「警察に電話して」って言ったんです。
ヒロト　（鈴江に）そんなことをしたら、あんたの甥っ子も捕まるぞ。
鈴江　健成はあなたたちに唆されただけ。主犯はあなたたちよ。恭一。
倫太郎　ヒロト、引き上げだ。

ヒロト　なぜおまえが俺に命令するんだ。
倫太郎　細かいことを気にするな。おまえ、警察に捕まっていいのか？
恭一　あんりちゃん、今度、兄貴が口を開いたら、その椅子で殴ってくれ。
あんり　任せてください。
恭一　山名さん、健成君があなたに借りた金は、全部で一千万でしたよね？
山名　それがどうかしましたか。
恭一　その絵を一千万で買い取ります。それで、この話は終わりにしませんか。
山名　その金は誰が出すんです。あなたですか？
恭一　僕にそんな金があるもんですか。ミセス・ワトソンに決まってるでしょう。
鈴江　私はびた一文出さないと言ったはずよ。
恭一　健成君を助けるためだ。出してください。
山名　一千万では安すぎる。あなたのお義兄さんにも、五千万以下で売るなって言われたし。
恭一　それなら、警察に電話するだけです。
山名　僕を脅しても無駄ですよ。本当は電話する気なんかないくせに。
鈴江　あなたは、欲の塊みたいな人ね。
恭一　ミセス・ワトソン、ここは僕に任せてください。
鈴江　でも、恭一。私にはこの男が許せないの。
山名　文句があるなら、今川さんに言ってください。彼さえしっかりしていれば、こんなことにはならなかったんだから。
鈴江　確かに、あの子は世間知らずです。でも、それを利用して、儲けようとしてるのは、あなたでしょう？
恭一　ミセス・ワトソン。

鈴江　（山名に）あなたは蛭よ。人間の肌に食いついて、生き血を吸う蛭。
山名　じゃ、今川さんはどうなんです。商才もないのに会社を作ったり、金もないのに結婚しようとしたり。まさか、あんな男に惚れる女がいるとはね。僕たちが蛭なら、あの女は蠅だ。
恭一　今、なんて言った。蠅だと？
山名　ええ。それがどうかしましたか。
恭一　わかった。商談は不成立だ。この絵はタダで返してもらう。
ヒロト　ふざけるな。
恭一　余計な手出しをしてみろ。警察に電話するぞ。
ヒロト　したければ、しろ。今川が捕まってもいいなら。
恭一　捕まってもいい。それで結婚が破談になれば、万々歳だ。
ヒロト　おまえ、何を言ってるんだ？
恭一　よく聞け。俺は蠅の兄貴、唯の兄貴だ。
ヒロト　何だと？
恭一　美波さん、その絵を貸してください。

恭一が美波に歩み寄る。ヒロトが恭一に飛びかかる。恭一がヒロトを突き飛ばす。ヒロトが恭一に殴りかかる。恭一が避けて、ヒロトを殴る。ヒロトが倒れる。

倫太郎　やったな、恭一！
山名　（恭一に）わかりました。あなたがそういうつもりなら、受けて立ちましょう。
恭一　（英語で）スージー、逃げろ！

美波とあんりが走り去る。が、鈴江も出口に向かうが、手前で立ち止まる。山名が恭一に殴りかかる。恭一が避けて、山名に殴りかかる。ヒロトが恭一をつかむ。恭一がヒロトを振り払う。山名が恭一をつかみ、殴る。恭一が倒れる。倫太郎が山名をつかむ。山名が倫太郎を突き飛ばす。倫太郎が倒れる。恭一が立ち上がり、山名につかみかかる。ヒロトが恭一をつかみ、殴る。恭一が倒れる。ヒロトが恭一をつかみ、立たせようとする。鈴江がヒロトに歩み寄り、スタンガンを撃つ。ヒロトが転がる。

山名　ヒロト！

鈴江　今のは二十万ボルト。次は三十万ボルトよ。

ヒロト　クソー！

ヒロトが立ち上がる。鈴江がスタンガンを撃つ。ヒロトが下がる。

鈴江　恭一。（とスタンガンを差し出す）

恭一　（受け取って）失神したくなかったら、とっとと出ていけ。

ヒロト　何だと？

山名　（恭一に）わかりました。今日のところは引き上げます。しかし、これで済むと思ったら、大間違いですよ。ヒロト。

山名とヒロトが去る。

倫太郎　大丈夫か、恭一？

恭一　義兄さんは。
倫太郎　俺は何ともない。応援してただけだから。
恭一　あれ？　美波さんとあんりちゃんはどこに行ったんだ？

そこへ、美波とあんりが戻ってくる。

美波　ごめん。奥の倉庫に避難してた。
恭一　あんりちゃん、その絵をミセス・ワトソンに返してあげてくれ。
あんり　どうぞ。（と差し出す）
鈴江　（受け取って）ありがとう。みんな、恭一のおかげよ。
恭一　いや、あなたのスタンガンのおかげですよ。
美波　急いで出た方がいいんじゃない？　あいつらが戻ってくる前に。
倫太郎　そうだな。恭一、行こう。（と恭一の手からスタンガンを取る）

美波とあんりが去る。恭一・鈴江・倫太郎が車に乗る。車が走り出す。

倫太郎　しかし、驚きましたね。あなたがこんな物騒なものを持ってたなんて。
鈴江　自分の身を守るためよ。
倫太郎　（恭一に）これがなければ、今頃、俺たちはボコボコにされてたな。
恭一　悪かったな。ついカッとなっちゃって。
倫太郎　まさか、おまえがキレるとは思わなかった。そうとわかっていたら、余計なチャチャは入れなかったのに。
恭一　ミセス・ワトソン、お願いがあります。山名に、一千万払ってやってくれま

せんか。

鈴江　どうして？

恭一　あいつがこのまま黙って引き下がるはずはない。必ず、何かしてきます。俺や兄貴は構わないけど、あなたや健成君にもしものことがあったら。

鈴江　私はすぐにアメリカに帰ります。健成には、気をつけるように言っておくわ。

恭一　健成君は男だから、まだいい。しかし、唯は女です。

鈴江　そう。あなたは唯が心配なのね？

恭一　だから、先に金を渡すんです。山名だって、バカじゃない。一千万が手に入れば、今日のことは忘れてくれるでしょう。

鈴江　私はイヤよ。泥棒に追い銭なんて、冗談じゃない。唯のことが心配なら、あなたが守ればいいでしょう。

恭一　しかし、唯は健成君と結婚する。

倫太郎　それはどうかな。さっきの大暴れで、おまえは歴史を変えてしまった。これから先に何が起こるかは、誰にもわからないんだ。

鈴江　歴史を変えるって？

倫太郎　いや、つまり、それほどの大事件だったということですよ。

鈴江　そうね。私にとっても、大事件だった。恭一の本当の気持ちがわかったし。

倫太郎　本当の気持ちって？

鈴江　恭一、あなたはやっぱり、唯が好きなのね。

恭一　だから、それは誤解なんですってば。

鈴江　そんなことはない。あなたは唯が侮辱されて、初めて怒った。それまでは、ずっと我慢してたのに。

恭一　いいえ。僕はずっとムシャクシャしてたんです。何年も前から。決められた

ことをやり続ける人生。やりたいことを諦める人生。そんな人生に、飽き飽きしてたんです。

一時間後。今川邸。絹代と理香がやってくる。

絹代　昨日はごめんなさいね。健成が失礼なことを言って。
鈴江　私の方こそ、大事な息子を叩いて、悪かったわね。
絹代　あら、あれぐらい、当然よ。あの子にはいいお灸になったと思う。
鈴江　確かに、少しは反省したようね。今朝、ホテルに謝りに来たわ。唯と一緒に。
絹代　へえ、あの子が。
鈴江　でも、どうせなら、一人で来てほしかった。唯がいないと、何もできないんだから。
絹代　仕方ないわよ。あの子の頭の中は、唯さんでいっぱいなんだから。さっきもいきなりやってきて、「結婚を認めてくれ」って大騒ぎ。
倫太郎　じゃ、健成君は今もここに？
絹代　私が「絶対に認めない」って言ったら、不貞腐れちゃって。自分の部屋に閉じこもったまま、出てきません。
倫太郎　じゃ、僕が呼んできましょう。
鈴江　あなたが行く必要はないわ。理香、行ってきてくれる？
理香　わかりました。

理香が去る。

鈴江　そうそう。この人は、私の二人目のガイド。（と倫太郎を示して）楽しいユーモアの持ち主よ。私はまだ堪能させてもらってないけど。

倫太郎　（絹代に）初めまして。武田倫太郎です。唯がご迷惑をかけてるみたいで、申し訳ありません。

絹代　じゃ、あなたも、唯さんのお兄さん？

倫太郎　ええ。僕が長男で、こいつが（と恭一を示して）次男です。

鈴江　（絹代に）二人とも、妹思いでね。唯と健成の結婚には、断固反対だって。

絹代　（倫太郎に）じゃ、私たちは仲間ね。一緒に協力して、二人の仲を裂きましょう。

恭一　ミセス・ワトソン。もったいぶらずに話したらどうですか、その絵のこと。

絹代　そうそう。さっきから気になってたのよ。姉さん、その絵は何？

鈴江　アンディの絵よ。

絹代　まさか、健成が持ち出した絵？

鈴江　そう。ついさっき取り戻してきたの。山名って男から。

絹代　信じられない。その絵のことはもう諦めてたのに。

鈴江　これで、話は振り出しに戻った。絹代、あなたの旦那さんのコレクション、やっぱり買い取らせてもらうわ。早速、交渉を始めましょう

絹代　わかった。今、リストを用意する。理香さん。

倫太郎　彼女は、健成君を呼びに行ったんですよ。

絹代　遅いわね。また、おかしな足音でも聞いたのかしら。

恭一・鈴江・倫太郎・絹代が去る。
二階の廊下。健成がやってくる。手には、布に包まれたキャンバス。後を追って、理香がやってくる。

理香　健成さん。
健成　（振り返って）なんだ、君か。
理香　その手に持っているものは何ですか？
健成　ああ、これはドガの絵だよ。なかなかいい絵だから、僕のマンションに飾ろうと思って。
理香　この家から、持ち出すつもりですか？
健成　しばらく借りるだけだよ。母さんには言わないでくれ。この絵は、母さんのお気に入りだから。
理香　私に嘘はつかないでください。
健成　嘘じゃない。この絵は本当に借りるだけさ。
理香　嘘はつかないでください。
健成　本当のことを言ったら、見逃してくれるかい？
理香　健成さんが、そうしてほしいなら。
健成　ありがとう、理香ちゃん。じゃ、本当のことを言うよ。僕は、山名って人に頼まれたんだ。この絵を持ってきてくれって。
理香　（反対に向かって）おば様！　健成さんがドガの絵を！
健成　騙したな！（と理香の口を塞ぐ）

そこへ、恭一・鈴江・倫太郎・絹代がやってくる。

絹代　健成！

鈴江　（健成に）その絵は何？　答えなさい、健成。

理香　ドガです。おば様が大好きな。

絹代　（健成に）あなたって子は、何回同じことをすれば気が済むの。

健成　仕方ないんだ。この絵を持っていかないと、山名さんは許してくれない。

恭一　その絵をよこせ。

健成　僕が殴られるのは構わない。でも、唯にもしものことがあったら。

恭一　よこせって言ってるんだ。聞こえないのか。

健成　あと一枚でいいんだ。それで、借金は返し終わる。

恭一　よこせ。（とキャンバスをつかむ）

健成　（手を放す）

倫太郎　健成君、君は山名に騙されてるんだ。借金なんて、ただの口実に過ぎない。

健成　本当は、君のお父さんのコレクションを狙ってるんだ。

鈴江　わかってます。でも、僕にはこうするしかないんです。

健成　そんなことはない。私はコレクションを買い取ることにしたの。だから、そのお金で借金を返しなさい。

鈴江　でも、伯父さんの絵は。

健成　私が取り戻してきた。この絵がそうよ。

鈴江　嘘だ。山名さんが素直に返してくれるはずがない。

健成　でも、返してくれたのよ。（と布を取って）ほら。（と絵を見せる）

鈴江　え？

健成　何よ、その顔は。この絵を見ても、まだ信じられないの？

健成　伯母さん、その絵は？
鈴江　（絵を見て、英語で）アンディの絵じゃない。
倫太郎　え？　今、なんて言いました？
恭一　「アンディの絵じゃない」って言ったんだ。
倫太郎　まさか。
鈴江　（英語で）どうして？　どうしてアンディの絵じゃないの？
恭一　どこかですりかわったんだ。
倫太郎　どこで？
恭一　最後にこの絵を見たのは、上杉画廊だ。

絹代と理香が去る。
一時間後。上杉画廊。

恭一　美波さん！　あんりちゃん！

そこへ、美波とあんりがやってくる。美波は頭に包帯を巻いている。

あんり　武田さん！
恭一　どうして電話に出なかったんだ。
あんり　ついさっきまで、病院に行ってたんです。社長が怪我をしたから。
恭一　（美波に）どうしたんですか、その頭は。
美波　やられたのよ、ヒロトってやつに。
倫太郎　一体、何があったんです。

鈴江　（美波に）アンディの絵は？　どこにあるの？

あんり　私が悪いんです。私が絵を間違えなければ、こんなことにはならなかったのに。

倫太郎　いつ間違えたんだ。

あんり　たぶん、武田さんと山名さんが殴り合ってる時だと思います。私と社長は、奥の倉庫に逃げたでしょう？

倫太郎　そう言えば、そうだったな。

あんり　あの時、私は絵を一度、床に置いたんです。で、出る時に、また持った。その時、違うのを持ったんだと思います。奥の倉庫には、こういうのがいっぱい置いてあるから。

美波　武田君たちが出ていった後、すぐに気づいてね。慌てて電話しようとしたら、そこへ山名たちが戻ってきたのよ。もちろん、抵抗したわよ。でも。

あんり　ヒロトって人は、ナイフを持ってたんです。

美波　「刺せるもんなら、刺してみなさいよ」って言ったら、本当に刺そうとしやがって。必死で避けたら、椅子にガーン。

倫太郎　で、あの絵を奪われたというわけですか。

美波　本当はすぐに知らせたかったんだけど、出血がひどくて。

恭一　縫ったんですか？

美波　ええ、七針も。傷が治っても、ハゲは残るでしょうね。ヒロトのやつ、一生恨んでやる。

恭一　よかったら、傷を見せてもらえますか。

美波　ダメよ。「明日までガーゼを取らないように」って、お医者さんに言われてるんだから。

恭一　どこの医者に。
美波　すぐそこの病院。
恭一　名前は。
美波　どうでもいいじゃない、そんなこと。それより、これからどうするか、考えないと。
恭一　いや、俺はぜひとも病院の名前が知りたい。教えてください。
美波　あなた、私を疑ってるの？
恭一　俺だって、疑いたくはない。しかし、話があまりにできすぎてるんでね。そうだろう、義兄さん？
倫太郎　恭一の言う通りだ。恭一と山名が殴り合ってたのは、一分か二分。その間に、倉庫に隠れたとして、絵を床に置くだろうか。僕だったら、絶対に置かない。山名が狙ってるのは、その絵なんだから。
あんり　私はドアを押さえてたんです。山名さんたちが入ってこないように。
倫太郎　山名がここに戻ってきた時、僕らはいなかった。当然、山名は、僕らが絵を持ち去ったと思ったはずだ。僕らが違う絵を持っていったなんて、気づくはずがない。誰かが教えない限り。
美波　あいつら、いきなり入ってきたのよ。私とあんりちゃんが、ここで絵を見てる時。
倫太郎　なぜ隠さなかったんです。
美波　そんな暇はなかったの。隠す前に、入ってきたのよ。
倫太郎　おかしいな。あなたは、山名が戻ってくるかもしれないと思っていたはずだ。それなのに、何の警戒もしてなかったんですか？
美波　確かに、絵を奪われたのは、私のミスよ。でも、それで私を疑うことはない

恭一　じゃない。私が武田君を騙して、何の得があるの？
ないとは言わせませんよ。あの絵をミセス・ワトソンに返したら、あなたには一銭も入らない。しかし、山名だったら、金になる。
美波　そんなこと、思ってもみなかった。
恭一　僕たちが出ていった後、あなたは山名に電話したんだ。絵はここにある。私が買い手を見つけるから、売れたら分け前をくれって。
美波　バカにしないでよ。私がそんな汚い真似、すると思う？
恭一　以前のあなたなら、しなかったでしょう。上杉画廊が扱う絵なんて、せいぜい百万がいいところだし。しかし、一億の絵を見て、目が眩んだんだ。二億で売れれば、一億儲かるって。そうだろう、あんりちゃん？
あんり　社長。
健成　（美波に）あの、携帯が鳴ってますよ。
美波　わかってるわよ。（と携帯電話を取り出す）

別の場所に、山名が現れる。

美波　もしもし。
山名　上杉さんですか。山名です。
恭一　（美波に）山名ですね？
山名　（美波に）そちらに、ミセス・ワトソンは来てますか。来てたら、かわってください。
美波　（鈴江に）あなたと話がしたいそうです。（と携帯電話を差し出す）
鈴江　（受け取って）もしもし。

山名　先程はどうも。実はあの後、例の絵を手に入れましてね。ぜひとも、あなたに買っていただきいんですが。
鈴江　いくらで？
山名　一億ですよ。何度も言ってるでしょう。
鈴江　あなたみたいな人にあげるお金は一銭もありません。お断りします。
山名　それは無理だ。あなたに断ることはできない。
鈴江　なぜです。
山名　僕が売りたいのは絵だけじゃないからですよ。ヒロト。

山名の横に、唯とヒロトが現れる。ヒロトは布に包まれたキャンバスを持っている。

山名　ミセス・ワトソンが、あなたと話をしたがってますよ。（と携帯電話を唯に差し出す）
唯　伯母さん、私、唯です。
鈴江　唯！
健成　伯母さん、唯がどうかしたんですか？
鈴江　あいつらに捕まったのよ。今、電話の向こうにいるの。
倫太郎　何だって？
恭一　（鈴江の手から携帯電話を取って）唯、大丈夫か！
山名　（携帯電話を戻して）その声は武田さんですね？　義妹さんのことはご心配なく。乱暴な真似はしてませんから。
恭一　唯を返せ。
山名　七時に、お台場現代美術館に来てください。義妹さんと絵は、そこで渡しま

す。

恭一　俺はおまえを許さない。

山名　僕もあなたは許さない。あなたをぶちのめすためなら、何でもやります。覚悟して来てください。じゃ。

恭一・鈴江・倫太郎・健成・美波・あんりが去る。

唯・山名・ヒロトが車に乗る。車が走り出す。

山名　今、何時だ。
ヒロト　あと五分で、三時です。
山名　お茶の時間か。（唯に）喫茶店に寄って、ケーキでも食べましょうか。
唯　私、甘いものは苦手なんです。
ヒロト　気にしてるのか？　体重。
唯　そうじゃなくて、本当に食べられないの。
山名　じゃ、あなたはお茶だけにすればいい。ただし、車を降りても、逃げようなんて考えちゃダメですよ。あなたが逃げたら、この絵は他の人の手に渡ることになる。
唯　やっぱり、私の言った通りだったんですね。
ヒロト　何の話だ。
唯　昨日、「ワトソンは三百万にしかならなかった」って言ったでしょう？　あれはやっぱり嘘だったんじゃない。
山名　それは、騙されたあなたの方が悪い。絵の相場ぐらい、自分で調べればよかったんです。
唯　ホッパーはいくらで売ったんですか？

ヒロト　八千万だ。
唯　八千万？　じゃ、健成君はもう借金を返し終わってるんじゃない。
ヒロト　借金て？
唯　健成君が山名さんに借りてるお金よ。
ヒロト　おまえ、まだ気づいてないのか。そんなもの、最初からないんだよ。
唯　どういうこと？
ヒロト　今川の友達は持ち逃げなんかしてない。山名さんに命令されて、姿を消したんだ。今頃は、大阪のイベント屋で働いてるはずだ。
唯　信じられない。（山名に）あなたが言ったことは、何から何まで嘘だったのね？
山名　去年の八月だったかな。知り合いのクルーザーに乗せてもらった時、今川さんに会ったんです。よく聞いたら、そのクルーザーは今川さんのものでもあった。共同出資ってやつです。ウィスキーで酔っ払った今川さんは、いろんな話をしてくれました。仕事のこと。家族のこと。お父さんのコレクションのこと。もちろん、あなたのこともね。
唯　その時、健成君に目をつけたの？
山名　彼は実に幸せそうだった。しかし、その幸せは、彼が実力で手に入れたものではない。周りの人間が用意したものだった。確かに、会社の経営はうまくいってなかった。普通だったら、金策に駆け回るところです。それなのに、彼は悠々と船遊び。会社が潰れても、どうってことはない。お父さんに泣きつけば、何とかしてもらえるから。
唯　そんなことない。健成君はお父さんから独立しようとしてた。一人で何とかしようとしてたんです。

山名　何が独立だ。何が一人だ。僕はああやって甘えながら生きている人間を見ると、虫酸が走るんだ。彼は自分の船は絶対に沈まないと思っている。だから、僕が沈めてやることにしたんです。この手でね。

ヒロト　ここでいいですか？　喫茶・酋長の娘。

山名　七時まで、まだたっぷり時間がある。ヒロト。今日は三個食べていいぞ。

唯・山名・ヒロトが去る。恭一・鈴江・倫太郎・健成・美波が車に乗る。車が走り出す。

健成　今から行ったら、五時には着いちゃいますよ。

恭一　それでいいんだ。早めに行って、山名が来るのを待つ。

健成　待ち伏せするんですか？

恭一　やつらが車を降りたところで、襲いかかる。唯と絵を奪って、すぐにトンズラだ。

美波　そんなにうまく行くかしら。

恭一　もちろん、美波さんにも手伝ってもらいます。裏切ったら、ただじゃおきませんよ。

倫太郎　やっぱり、警察に届けた方がいいんじゃないか？

恭一　唯にもしものことがあったら、どうするんだ。

倫太郎　それはそうだけど、もしおまえの計画が失敗したら？　唯だけじゃなくて、俺たちまでやられるぞ。

恭一　その時は、ミセス・ワトソンの登場だ。

鈴江　私？

恭一　山名の要求通り、一億出してください。

鈴江　いやよ。

恭一　そう言わずに、お願いします。あなたは、あの絵は特別だって言った。一億でも安いぐらいだって。

鈴江　確かに言ったわ。でも、相手が山名だったら、話は別。あんな男に、一銭もやるもんですか。

恭一　あなたが断ったら、山名は別の人間にあの絵を売りますよ。それでもいいんですか。

鈴江　わかったわよ。出せばいいんでしょう、出せば。

恭一　ありがとうございます。

健成　伯母さん、すいませんでした。僕があの絵を持ち出さなければ、こんなことにはならなかったのに。あの絵がそんなに大切なものだなんて、知らなかったんです。

鈴江　絹代はあなたに話した？　私とあなたのお父さんが恋人同士だったこと。

健成　いいえ。今、初めて聞きました。

鈴江　美大の同級生でね。いずれは結婚しようと思ってた。私は、あなたのお父さんの描く絵が大好きでね。この人はきっと偉い画家になるって信じてたの。でも、あなたのお父さんは筆を捨てた。ご両親に反対されて、画家になることを諦めたの。それが私には許せなくてね。一人でアメリカに行くことにしたの。

美波　男を捨てて外国へ。カッコいい。

鈴江　アンディと結婚したのは、三十歳の時。彼のアトリエで、昔の作品を見てたら、あの絵があったの。びっくりしたわ。農家の納屋の絵。テーマも構図もあなたのお父さんが学生時代に描いたものとそっくりだった。でも、私には

健成　あなたのお父さんの絵の方が上に見えた。信じられる？　あなたのお父さんは、アンディより偉い画家になれたかもしれないのよ。

鈴江　信じられません、そんなこと。

健成　だから、あの絵を送ったの。あなたのお父さんに忘れてほしくなかったから。

恭一　絵を描いていたこと。画家を目指していたこと。私のこと。

鈴江　父はあの絵を、ずっと書斎に飾ってました。僕が物心ついた頃から、ずっと。

恭一　アンフォゲッタブル。

鈴江　え？

恭一　あなたにとっては、忘れられない人だったんですね。

恭一と倫太郎が立ち上がる。鈴江・健成・美波も去る。

倫太郎　恭一、おまえは何年から来たんだ。

恭一　二〇〇三年。来年からだ。

倫太郎　だから、今年の出来事に詳しかったのか。

恭一　ああ。今年の日記を読んだからな。

倫太郎　俺も唯も生きてたんだろう？　二〇〇三年になっても。

恭一　もちろん。

倫太郎　じゃ、これからお台場に行っても、死ぬことはないわけだな。

恭一　それはわからないよ。歴史は変わったんだ。

倫太郎　でも、おまえは言ったじゃないか。歴史を変えても、大した影響はないって。

恭一　わからない。俺にもよくわからないんだ。こんなことは初めてだから。

時計が秒針を刻む音。恭一の動きが止まる。周囲の明かりが点滅する。倫太郎が去る。
一年後の五月一日夕。武田骨董店。弦五郎がやってくる。

弦五郎　恭一？　恭一？
恭一　え？
弦五郎　俺は武田弦五郎。ここは武田骨董店だ。わかるか？
恭一　ああ、わかるよ、義父さん。
弦五郎　よかった。どうやら、おまえは子供じゃないようだな。スキップは何回目だ。
恭一　何回目だったかな。二十七か、八か。
弦五郎　じゃ、もうベテランだ。俺が世話を焼かなくても、大丈夫だな。
恭一　今は何年？
弦五郎　ああ、忘れてた。今は二〇〇三年。おまえは三十一歳だ。
恭一　義父さんは六十一歳だね。
弦五郎　肩凝りはひどいが、それ以外はきわめて健康だ。この調子だと、百歳まで生きられるかもしれない。
恭一　それはちょっと難しいんじゃないかな。（と尻餅をつく）
弦五郎　どうした、恭一。
恭一　悪いけど、水を一杯、飲ませてくれないか。
弦五郎　いいとも。（奥に向かって）倫太郎！　倫太郎！

そこへ、倫太郎がやってくる。

倫太郎　何だい、父さん。

弦五郎　水を一杯、持ってきてくれ。
倫太郎　水ぐらい、自分でいれればいいだろう。
弦五郎　恭一がスキップしてきたんだ。頼む。
倫太郎　わかった。

倫太郎が去る。

弦五郎　どうしたんだ。大分、疲れてるようだが。
恭一　ちょっとショックなことがあってね。
弦五郎　ショックって？
恭一　俺はついさっきまで、二〇四一年にいたんだ。
弦五郎　二〇四一年？　それはまた、ずいぶん先だな。おまえは六十九歳か。
恭一　義父さんは九十九歳だよ。
弦五郎　わかった。俺が死んだんだな？　そのショックで、尻餅をついたんだろう。
恭一　違うよ。

そこへ、倫太郎が戻ってくる。手には、水の入ったコップと本。

倫太郎　ほら、いれてきたぞ。（とコップを差し出す）
恭一　（受け取って）ありがとう、義兄さん。（と飲む）
倫太郎　それから、これ。昨日までの日記だ。（と本を差し出す）
恭一　ありがとう。これを飲んだら、読むよ。
倫太郎　顔色がよくないな。スキップの前に、何かあったのか？

弦五郎　こいつは二〇四一年から来たそうだ。
倫太郎　それは、今までで最高記録だよ。（恭一に）おまえは少なくとも、六十九歳までは生きるわけだ。
恭一　違うんだ。俺は六十九歳で死ぬんだ。
弦五郎　何だって？
恭一　六月に血を吐いて、病院に担ぎ込まれたんだ。検査の結果は、胃癌だった。手術はしたけど、もう手遅れだった。それからはずっと入院生活。八月になると、体を起こすこともできなくなった。そのうち、日付もわからなくなった。最後に見たのは、唯の顔だったかな。あいつもすっかりおばさんになってた。で、ふと目を開けると、ここにいたんだ。
弦五郎　そうか。おまえは臨終を体験してきたのか。
恭一　死ぬのは別に怖くなかった。最後はろくに意識がなかったし。正直言って、これでやっと楽になると思った。二度とスキップしなくて済むって。
倫太郎　しかし、まだ経験してない年が残ってるだろう。全部経験するまでは、死なないんじゃないか？
恭一　そうか。そういうことなんだな。
倫太郎　そういうことって？
恭一　すべての年を経験して、最後にあの年に戻るんだ。俺が十二歳の年に。
倫太郎　そうかもしれないな。そもそもスキップが始まったのは、あの時のショックが原因なんだから。
恭一　俺はあのショックからずっと逃げ続けてるんだ。でも、最後は戻らなければならない。あの車の中に。
弦五郎　恭一。

恭一　大丈夫だよ、義父さん。まだまだ先の話じゃないか。
倫太郎　二〇四一年の俺はどうだった。
恭一　元気だったよ。週に一度はお見舞いに来てくれた。
弦五郎　俺は？
恭一　義父さんは来なかった。どうしてかな。
弦五郎　決まってるだろう。俺は死んだんだ。そうか。九十九歳までは生きられないのか。
倫太郎　（恭一に）唯は。
恭一　あいつは毎日来てくれた。俺の身の回りの世話をしてくれてたんだ。
倫太郎　おまえは死ぬまで独身だったのか。
恭一　でも、一人で死なずに済んだ。唯がいてくれたから。
倫太郎　そうか。
恭一　死ぬ前に言えばよかった。ずっと好きだったって。でも、気づいた時には、ろくに口がきけなくなってたんだ。

恭一・倫太郎・弦五郎が去る。

三時間後。お台場現代美術館。唯・山名・ヒロトがやってくる。ヒロトは布に包まれたキャンバスを持っている。

山名　今、何時だ。
ヒロト　あと五分で、六時です。
山名　よし。そろそろ中に入るとするか。
ヒロト　（唯に）行くぞ。
唯　一時間も前に行って、何をするの？
山名　待つんですよ、ミセス・ワトソンを。
唯　それだけ？
山名　取引というものは、心理的に優位に立った方の勝ちです。待ち合わせだったら、相手より先に行って、その場所の雰囲気になじんでおく。そうすると、相手はまるでよその家を訪ねたような気持ちになる。
唯　それって、恭一義兄ちゃんには全然効果ないと思う。あの人、待ち合わせに遅刻しても、全然気にしないから。
山名　僕は、時間を守らない人間を見ると、虫酸が走るんだ。
ヒロト　やっぱり、もう少し車にいますか？
山名　いや、行く。素人とは言え、向こうも必死だ。待ち伏せでもされたら、たま

らない。

唯・山名・ヒロトが去る。そこへ、倫太郎がやってくる。携帯電話を持っている。

倫太郎　もしもし、恭一か、俺だ。

別の場所に、恭一が現れる。携帯電話を持っている。

恭一　どうした？　山名が来たのか？

倫太郎　ああ。唯とヒロトも一緒だ。あいつら、隣のビルの駐車場に、車を停めたようだ。

恭一　クソー。その手があったか。

倫太郎　どうする？　作戦変更か？

恭一　それは会ってから話し合おう。

倫太郎　わかった。入り口の所で待ってる。

倫太郎が去る。恭一も消える。唯・山名・ヒロトがやってくる。ヒロトは布に包まれたキャンバスを持っている。

唯　私、トイレに行きたいんだけど。

ヒロト　我慢しろ。

唯　それは無理。もう限界。

ヒロト　なぜ喫茶店にいる時に行かなかったんだ。

唯　言い出せなかったのよ。恥ずかしくて。
ヒロト　さては、大きい方か？
山名　ヒロト。俺の前でシモネタは止めろと言ったはずだ。
ヒロト　すいません。
山名　（ヒロトの手からキャンバスを取って）唯さんをおトイレにご案内しろ。くれぐれも、目を放すなよ。
ヒロト　え？　俺も中に？
山名　ヒロト。
ヒロト　すいません。（唯に）おい、行くぞ。

唯とヒロトが去る。山名が椅子に座る。そこへ、倫太郎がやってくる。後を追って、健成がやってくる。

健成　お義兄さん。
倫太郎　わあー、ビックリした。脅かすなよ、バカ。
健成　すいません。お義兄さん、唯は？
倫太郎　ヒロトと向こうへ行った。絵でも見に行ったんじゃないか。
健成　追いかけましょう。
倫太郎　いや、もうすぐここに恭一が来るんだ。だから、待ってないと。

健成が去る。

倫太郎　バカ。人の話を聞け。

倫太郎が去る。次の会話の間に、山名も去る。唯とヒロトがやってくる。

ヒロト　トイレに入ったら、歌を歌え。
唯　どうしてよ。
ヒロト　そうすれば、おまえが中にいるってわかるだろう。
唯　他の人がいたら、どうするのよ。変な女だと思われるじゃない。
ヒロト　歌がいやなら、百人一首でもいいぞ。
唯　大丈夫よ。絶対に逃げないから。

唯が去る。

ヒロト　（奥に向かって）俺が上の句を言うから、おまえは下の句を答えろ。「しのぶれど色にいでにけりわが恋は」

そこへ、健成がやってくる。

健成　「ものやおもふとひとのとふまで」
ヒロト　おまえが答えろって誰が言った。
健成　唯を返せ。
ヒロト　なんだ、その口のきき方は。山名さんがいないと思って、いい気になるなよ。

ヒロトが健成を殴りかかる。健成が避ける。そこへ、唯が戻ってくる。

唯　　健成君！
健成　　（ヒロトをつかんで）逃げろ、唯！

唯が逃げる。ヒロトが健成を突き飛ばす。健成が倒れる。ヒロトが唯につかみかかる。
そこへ、倫太郎がやってくる。

倫太郎　　（スタンガンを突き出して）動くな。
唯　　お義兄ちゃん。（と倫太郎の背後に隠れる）
ヒロト　　（倫太郎に）そんなものに何度もやられると思ってるのか？（とナイフを取り出す）
倫太郎　　ヒロト。おまえってやつは、そんなものに頼らないと、何もできないのか。
ヒロト　　おまえが言うな。

そこへ、恭一がやってくる。

恭一　　（倫太郎に）そいつの相手は俺がする。唯を連れて、逃げてくれ。
倫太郎　　仕方ない。ヒロトはおまえに譲ってやろう。唯。

唯と倫太郎が去る。

恭一　　昼間はずいぶん強く殴ってくれたな。
ヒロト　　今度はもっと痛いぞ。泣くなよ。

健成がヒロトにつかみかかる。ヒロトが健成を突き飛ばす。恭一がヒロトの腕をつかみ、ナイフを奪い取る。ヒロトが恭一を突き飛ばす。ヒロトが去る。

恭一　弱いくせに、手を出すな。
健成　僕は、少しでもお義兄さんの役に立ちたくて。
恭一　その気持ちは評価してやる。しかし、俺をお義兄さんて呼ぶな。

恭一が去る。後を追って、健成も去る。美波がやってくる。携帯電話を持っている。後を追って、鈴江がやってくる。

鈴江　何をしてるの？
美波　いいえ、何も。
鈴江　隠してもダメよ。メールを打ってたんでしょう？　相手は誰。山名？

そこへ、山名がやってくる。布で包まれたキャンバスを持っている。

山名　こんばんは、ミセス・ワトソン。まさか、あなたの方が先に来てるとは思いませんでしたよ。
鈴江　（美波に）あなたが知らせたのね？　ここにいるって。
美波　すみません、ミセス・ワトソン。うちの画廊も、資金繰りが大変なんですよ。せっかくつかんだビジネス・チャンスを、逃がすわけにはいかなくて。
山名　（鈴江に）金は用意してくれましたか。

鈴江　いいえ。

山名　ということは、小切手ですか。僕もその方が都合がいい。一億円のキャッシュを持ち帰るのは大変ですからね。

鈴江　何か勘違いしているようね。私は電話でこう言ったはずよ。あなたみたいな人にあげるお金は一銭もありませんって。

山名　この絵がどうなってもいいんですか？

鈴江　ええ。

美波　でも、車に乗ってる時は、一億出すって。

鈴江　あの時は、唯の命がかかってたから。今頃は、恭一が無事に助け出してるでしょう。

美波　この絵は、あなたの大切な思い出なんでしょう？　今、断ったら、二度と見られなくなるんですよ。

鈴江　（山名に）あなたにお金をあげるぐらいなら、きっぱりと諦めます。

山名　あなたって人は、本当に頑固ですね。さよなら、ミセス・ワトソン。

鈴江　さよなら、ミスター・山名。

そこへ、恭一と健成がやってくる。

恭一　山名！

美波　武田君、お先に。

山名と美波が去る。

健成　どうしてあいつがここに。
鈴江　上杉さんが呼んだのよ。メールで。
健成　あの絵はどうしたんです。あいつは買えって言わなかったんですか。
鈴江　言ったわ。でも、断った。
健成　なぜです。
鈴江　唯は？
恭一　兄貴が助け出しました。先に戻ってるかと思ったのに。
鈴江　だったら、これでこの話はおしまい。二人が戻ってきたら、帰りましょう。
恭一　あの絵は諦めるんですか。
鈴江　もういいのよ。唯が無事なら、それで十分。
恭一　冗談じゃない。あなたはあの絵を取り戻すはずだったんだ。俺が歴史を変えなければ。
健成　歴史って？
恭一　（鈴江に）ヒロトがここに来るかもしれない。来たら、これで身を守ってください。（とナイフを差し出す）
鈴江　（受け取って）恭一。

恭一が去る。後を追って、健成も去る。鈴江も去る。倫太郎と唯がやってくる。

倫太郎　クソー、駐車場はどこだ。階段はどこだ。その前に、ここはどこだ。
唯　ここはさっき通った。戻った方がいいと思う。
倫太郎　恭一のやつ、大丈夫かな。まさか、ヒロトにナイフで。
唯　やめてよ、いやなこと言うの。

倫太郎　唯、恭一が死んだらどうする。
唯　死ぬわけないでしょう。恭一義兄ちゃんは強いんだから。
倫太郎　おまえはあいつを誤解してるぞ。確かに腕力は強いが、気持ちの方はそうでもない。見た目より、ずっと繊細なんだ。
唯　そんなことない。恭一義兄ちゃんは一人で生きていける人よ。私がいなくても。
倫太郎　だから、それは誤解なんだって。
唯　倫太郎兄ちゃんに何がわかるのよ。私はずっと恭一義兄ちゃんが好きだった。恭一義兄ちゃんが家に来た時からずっと。でも、恭一義兄ちゃんの目には、私なんか映ってなかった。自分のことしか考えてなかった。
倫太郎　それは仕方ないことだったんだ。
唯　どうしてよ。
倫太郎　あいつは五月一日が来るたびに、一からやり直さなければならなかった。自分の場所を確保することで精一杯だったんだ。いいか、唯。恭一は。

そこへ、ヒロトがやってくる。

ヒロト　探したぞ、唯。
倫太郎　来るな。来たら、こいつで失神させるぞ。（とスタンガンを構える）
ヒロト　その前に、おまえをあの世に送ってやる。
倫太郎　来るな。

倫太郎がスタンガンを撃つ。ヒロトが避ける。が、スタンガンは不発。

倫太郎　あれ？　おかしいな。
唯　もしかして、電池が切れたんじゃない？
倫太郎　クソー。どうしてこんな時に。
ヒロト　来い、唯。

倫太郎がヒロトに殴りかかる。ヒロトが避けて、倫太郎を殴る。倫太郎が倒れる。そこへ、健成がやってくる。健成がヒロトに飛びかかる。ヒロトが健成に殴りかかる。健成が避ける。倫太郎がヒロトをつかむ。健成がヒロトを殴る。ヒロトが倒れる。

唯　健成君。
健成　信じられない。勝っちゃったよ。
唯　健成君、恭一義兄ちゃんは？
健成　山名を追いかけた。
唯　一人で？
健成　いや、僕も追いかけたんだけど、（ヒロトを示して）こいつの後ろ姿が見えたんで。

唯が去る。

健成　唯！
倫太郎　何してるんだ。おまえも行け。

健成が去る。倫太郎がヒロトをつかみ、立たせる。倫太郎とヒロトが去る。山名と美波がやってくる。山名は布で包まれたキャンバスを持っている。

山名　じゃ、この絵はあなたに預けます。いい買い手を探してくださいよ。（とキャンバスを差し出す）

美波　（受け取って）一応、中身を確かめてもいいですか？

山名　もちろん。

美波　（布を取って、絵を見て）確かに。

そこへ、恭一がやってくる。

恭一　待て。

山名　あなたにもう用はない。

恭一　おまえになくても、俺にある。

山名　なるほど。どうしてもぶちのめしてほしいわけですか。いいでしょう。

山名が美波にキャンバスを渡す。山名が恭一に殴りかかる。恭一が避ける。恭一が山名に殴りかかる。山名が避ける。山名が恭一を殴る。恭一が倒れる。山名が恭一を蹴る。恭一が転がる。そこへ、鈴江がやってくる。美波の手から、キャンバスを奪い取る。

美波　何するの？

美波が鈴江につかみかかる。鈴江が美波にナイフを向ける。美波が立ち止まる。

鈴江　（英語で）山名。恭一を放しなさい。
山名　黙れ。
鈴江　（英語で）放しなさい。（とキャンバスにナイフを向ける）
山名　やめろ。（と恭一を放す）
鈴江　もう終わりにしなさい。こんなもの、ただの絵じゃないの。
山名　返せ。
鈴江　人間より大切なものなんて、この世にはないの。（とキャンバスにナイフを突き刺す）
山名　バカやろう！

山名が鈴江につかみかかる。恭一が山名につかみ、殴る。山名が倒れる。そこへ、唯と健成がやってくる。

唯　お義兄ちゃん、大丈夫？
恭一　（うなずく）

恭一が座り込む。健成が鈴江の手からナイフを取る。健成が山名をつかみ、立たせる。唯・健成・山名・美波が去る。

恭一と鈴江が車に乗る。車が走り出す。鈴江は布に包まれたキャンバスを持っている。

鈴江　痛むの？

恭一　ええ、とっても。

鈴江　弱いくせに、喧嘩するからよ。あなたが山名に勝てるわけないのに。

恭一　でも、勝ちましたよ。

鈴江　何言ってるの。私が行くまでは、一方的にやられてたくせに。

恭一　僕はその絵を取り返すために、必死で戦ったんです。それなのに、いきなりナイフで刺したりして。

鈴江　かなり大きな穴が開いちゃったわね。

恭一　大切な思い出じゃなかったんですか。

鈴江　アメリカに帰ったら、修復してもらうわ。知り合いに、腕のいい人がいるのよ。

恭一　そうしてください。その絵がダメになったら、僕は殴られ損だ。

鈴江　恭一、本当のことを言ってちょうだい。

恭一　本当のことって？

鈴江　あなたがこの絵を取り返そうとしたのは、唯のためでしょう？

恭一　違いますよ。

鈴江　山名がこの絵を持っていったら、唯は健成と結婚できなくなる。そう思ったんでしょう？　正直に言いなさい。

恭一　ええ、そうです。唯は健成君と結婚しなくちゃいけない。これはもう決まったことなんです。

鈴江　あなたには未来がわかるから？

恭一　ええ。

鈴江　だから、唯に好きだって言わないの？

恭一　僕は死ぬまで言わない。これも決まったことなんです。

鈴江　そんな未来、ぶち壊してやればいいじゃない。

恭一　それは何度も考えました。しかし、ぶち壊して、幸せになるとは限らない。前より不幸になったら、取り返しがつかないんだ。

鈴江　私はぶち壊したわ。健成の父親を残して、一人でアメリカに行った。

恭一　あなたの場合はうまくいったかもしれない。しかし———

鈴江　最後まで聞きなさい。アメリカに行ったのは、二十二歳の時。ニューヨークの美術学校に入って、絵の勉強を始めた。そこで知り合った人と、三年後に結婚したの。もちろん、アメリカ人よ。とても才能のある人だったけど、繊細すぎるところがあってね。絵に行き詰ると、酒浸りになって、私に暴力まで振るったの。で、たったの三年で離婚。アンディと出会った時は、これでやっと幸せになれると思ったわ。だって、私は日本にいた頃から、アンディのファンだったんだもの。でも、いざ結婚してみたら、ガッカリ。英雄色を好むって言うでしょう？　アンディもそう。教え子、モデル、ジャーナリスト。次から次へと手を出して、「いやなら、別れてもいいんだぞ」って。それでも別れなかったのは、あの人の絵が好きだったから。夫としては最低だ

ったけど、画家としてはやっぱり最高だったのよ。
考えたことはありませんか。健成君のお父さんと結婚した方が幸せだったかもしれないって。
恭一　考えたわよ、何度も何度も。でも、私は後悔してない。私が不幸だったなんて、誰にも言わせない。
鈴江　誰も言ってませんよ、そんなこと。
恭一　だったら、あなたも言わないで、恭一。自分が不幸だなんて。
鈴江　え？
恭一　未来はきっと変えられる。幸せになれるかどうかは、その勇気があるかどうかなのよ。
鈴江

一時間後。プリンセスホテルのロビー。

鈴江　これ、二日間のお礼よ。（と封筒を差し出す）
恭一　（受け取って）ありがとうございます。あれ？　結構、重いですね。
鈴江　小切手じゃなくて、現金にしたからね。
恭一　（封筒を覗き込んで）これ、ちょっと多すぎるんじゃないですか？
鈴江　ガイド代の他に、薬代もつけておいた。帰りに、絆創膏でも買いなさい。
恭一　しかし、これは多すぎる。
鈴江　私の感謝の気持ちよ。いいから、黙って受け取りなさい。
恭一　わかりました。ありがたく頂戴します。
鈴江　二日間、楽しかったわ。
恭一　僕もです。あなたのことは絶対に忘れません。

鈴江　アンフォゲッタブル？
恭一　ええ、まあ。
鈴江　これが最後じゃないわよね？　私たちはまたいつか再会するんでしょう？
恭一　ええ。五年後に、チャッズフォードで。でも、歴史は変わってしまった。もしかしたら、会えなくなるかもしれません。
鈴江　いいえ、私たちはきっと会うわ。その時、あなたの横に唯がいることを祈ってる。
恭一　ちょっと待ってください、ミセス・ワトソン。僕が唯と結婚したら、健成君はどうなるんです。あなたは健成君の伯母さんのくせに――――
鈴江　（英語で）さよなら、恭一。
恭一　（英語で）さよなら、スージー。

鈴江が去る。恭一も去る。
五月五日昼。倫太郎のマンション。倫太郎と節子がやってくる。倫太郎は原稿用紙の束を、節子はコーヒーカップを三つ載　せたお盆を、それぞれ持っている。

倫太郎　（奥に向かって）恭一、小笠原君がコーヒーをいれてくれたぞ。
節子　先生のご兄弟って、本当に仲がいいんですね。
倫太郎　そうかな。
節子　だって、私がここに来ると、必ず義弟さんがいるじゃないですか。そうか、わかった。
倫太郎　何が？
節子　先生の小説は、本当は義弟さんが書いてるんじゃないですか？

倫太郎　そんなことがあるわけないだろう。
節子　でも、この前来た時、洗面所に義弟さんの日記がありましたよね？　あれは本当は日記じゃなくて、原稿の下書きなんじゃないですか？
倫太郎　違うよ。本当に日記だよ。
節子　でも、おかしくないですか？　義弟さんの日記がお義兄さんの家にあるなんて。
倫太郎　あれは、前の日に恭一が持ってきたんだよ。恭一は毎年五月一日に、遠くに行くんだ。
節子　遠くって？
倫太郎　恭一にしか行けない所だよ。帰ってきた時、恭一は別人のようになってる。時には、日記のことを忘れてる時もある。だから、僕が預かることにしてるんだ。毎年四月三十日にね。
節子　そんな説明じゃ、全然納得できません。大体、義弟さんしか行けない所って、どこですか？
倫太郎　どこでもいいじゃないか。それより、小笠原君、この原稿だけど。

そこへ、恭一がやってくる。

恭一　義兄さん、もう書き終わったのかい？　『沖田総司少年の事件簿』。
倫太郎　違う、違う。これは、小笠原君が書いたんだ。彼女はこう見えても、作家志望なんだよ。で、自分の書いた作品を読んでくれって、持ってきたんだ。ほら。（と原稿用紙の束を差し出す）
恭一　（受け取って）へえ。

節子　小学校の時からの夢なんです。芥川賞を取ることが。
恭一　芥川賞ねえ。（と表紙を見て）「笠原セツ」？
節子　ペンネームです。小笠原節子だと長すぎるんで、オとコを取って、笠原セツ。小学校の時に考えたんです。
恭一　君は作家になれるよ。賞も取る。芥川賞じゃなくて、直木賞だけど。
倫太郎　本当か？
節子　（恭一に）そう言ってもらえるのはうれしいけど、あなたはまだ一ページも読んでないじゃないですか。
倫太郎　読まなくてもわかるんだよ、恭一には。（恭一に小声で）間違いないのか？
恭一　（小声で）間違いない。だって、『沖田総司少年の事件簿』は、笠原セツが書いたんだから。
倫太郎　なんですと？
節子　何を話してるんですか？
倫太郎　別に何も。

そこへ、唯がやってくる。

唯　お邪魔します。
倫太郎　唯。どうしたんだ、いきなり。
唯　ちょっとね。あ、このコーヒー、いい？（と倫太郎が持っていたカップを取って飲んで）うわー、甘い。
倫太郎　だろうな。砂糖が三杯、ミルクが二杯入ってるから。
節子　（唯に）よかったら、いれてきましょうか？

唯　お願いします。

節子が去る。

倫太郎　成田に行ったんじゃなかったのか？　ミセス・ワトソンを見送りに。

唯　行かなかった。

倫太郎　どうして。健成のお母さんに、「来なくていい」とでも言われたのか？

唯　昨日、健成君と喧嘩しちゃってね。顔を合わせたくなかったんだ。伯母さんには今朝電話して、謝っておいた。そうしたら、「チャッズフォードに遊びに来なさい」って言われちゃった。恭一義兄ちゃんと一緒に。

恭一　なぜ健成と喧嘩したんだ。

唯　私が「結婚の話はナシにして」って言ったら、怒っちゃって。

恭一　何？

倫太郎　唯、今の話は本当か？　おまえ、健成と結婚しないのか。

唯　しない。

倫太郎　どうして。

唯　何だか不安になっちゃったの。あの人、私に借金のこと、隠してたし。山名なんて怖い人と付き合ってたし。あんな目に遭うのは、もう懲り懲り。

恭一　しかし、おまえが健成と結婚するのは、もう決まったことなんだぞ。

唯　何よ。この前は、反対だって言ったくせに。

恭一　それはそうだけど、俺は何のために山名に殴られたと思ってるんだ？

唯　絵を取り返すためでしょう？

恭一　それはそうだけど。

倫太郎　（唯に）こういうことはじっくり考えてから、決めた方がいいんじゃないか？たとえば、しばらく延期するとか。

唯　しないって言ったら、しないの。これ以上、私の人生に口出ししないで。

倫太郎　恭一。

恭一　義兄さん。

倫太郎　未来が変わるぞ。どうするんだ、恭一？

恭一　今度こそ言うさ。俺が言いたかったことを。唯。

恭一が唯に話しかける。唯が聞く。倫太郎が間に割って入る。恭一が倫太郎を突き飛ばす。唯が恭一を怒る。恭一が唯に謝る。倫太郎が笑う。唯も笑う。恭一が二人を怒る。倫太郎と唯が謝る。恭一が再び話し始める。ふと、三人が空を見上げる。飛行機の飛び去る音。

＜幕＞